
宇宙の騎士はI Sの世界でどう動く！？

リーゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙の騎士はISの世界でどう動く！？

【Nコード】

N4233X

【作者名】

リーゼ

【あらすじ】

子供を助けて逆に車に引かれて死んだ男が神の玩具に……………なるわけがなく、逆に神を強いたげてISの世界に転生する。宇宙の騎士の力を得て……………。ISにオリ主を混ぜた駄文です。作者は原作を全く知りませんが、それなりに頑張っていると思います。

いきなり死す！？そして授かる宇宙の騎士の力（前書き）

やっちまった…………orz

間違いなく自分で書いた中で駄文オブザイヤーにノミネートされるものを…………。

でも後悔は…………ちよっとしてるかも…………

反省は海よりも深く…………

いきなり死す！？そして授かる宇宙の騎士の力

やあ、初めまして！

俺は如月 直哉。きむろのあなな

二十歳の大学生だった（・・・）男だ！

えっ？何でだったって？？それはね……………#

「ホントにすまんかった！だから俺の背中足をどけてくれないかっ！？」

この神とか名乗ってるイケメンに殺されたからだよっ！！ギリッギリッ…（更に力を込めて踏みにじる）

「ああああああっ！?!?!?やめてえええっ！折れちゃう折れちゃうっ！！」

「ああん？人様の事を殺しといて我が物顔してるやつの戯れ言なんざ聞こえんなあ！」

ギリッギリッギリッギリッ……………！

「らめえええっ！別の世界に旅立つちゃうからあああああっ!?!」

そもそも、何で俺が殺されたか……………。

話は数時間前に遡る……………。

俺は講義が終わってちょっとゲーセンに寄ったんだ。取り敢えずクレーンゲームをやってそれなりに景品も取れたし、帰ろっかなあと

思っただ……。

でも、その途中で子供が車道に飛び出して跳ねられそうだったんだ。俺は無我夢中で走ったよ。取った景品何かほっぽり出してね……。それで間に合って子供を歩道に突き飛ばしたはいいんだけど……。

俺が逃げるのに間に合わなくて跳ねられちゃったんだよねえ……。いやあ、あの時はマジで痛かったなあ……。

想像を絶する痛みってあんな風なことを言うんだな！それで、魂だけの存在になった俺を勝手にこんな訳の解らん場所に連れてきたのが今踏んづけてるコイツ（イケメン神）。

何でも、本来なら俺が死ぬんじゃないか？あの子が死んでコイツの玩具的な存在になるとかほざいてたんだよ！別の世界に転生させて自分が楽しむとか何とか……

流石にそれ聞いて俺もぶちギレちゃってねえ……

イケメンを殴り飛ばして、今下敷きにして踏んづけてるのよ！

え？神をぶん殴れるのかって？？

そこはほら、何となく出来ちゃったって事で

「そんでえ？俺を殺しといて詫びのひとつもないのかなあ？？」

「ご、ごめんなさいっ！ごめんなさい！！ホントに反省してますっ！だからこれ以上踏むのやめてええっ！……あ……だんだん気持ちよくなってきた……」

うわ、性格破綻の上にドMかよ……引くわあ……これ以上踏んでコイツが今みたいに変態になるのは御免だからそろそろ勘弁してやるか……。

「ハアツ……ハアツ……ハアツ……あ、危つく変な世界に旅立ちかけたじゃないかあつ!!」

「いや、その前に踏むの止めたんだからありがたく思えよ?」

「……………ムウウツ……………まあいいさ!君には僕の玩具として過ごしてもらつよ!!異論は無いね!?!」

いや、ていうか……………

「異論ありまくりに決まってるだろ」

パンツ!!

「ふぎやつ!?!き、君はさっきから僕に虐待してくるが、一体なんの権限がつ!?!」

権限……………決まってるだろうが……………!

「俺を殺した被害者としてにきまつとろおがあああああつ!!!!!!」

ドゴツ!バキヤツ!メギヤツ!ガギイツ!!

「ぎあああああああああつ!!?!?!」

「ふう……ちつとはスッキリしたかな……」

「う、うう………」

ひとしきり殴り終えてイケメン神から離れる。

まあ、無事なところがないぐらい顔面が腫れ上がってるけどな（笑）
さて、と……そろそろ本題に入ろうかね……

「んで？俺を殺したんだ、それなりの誠意ってやつを見せてもらおうかね？」

「ひ、ひいいつ……や、ヤザ………」

「だがあれがヤザだつてえ？？こないたいけな一般人を捕まえといて……」

「す、すいませんでした……お、お詫びと言っではなんです……
……貴方を別の世界に転生という形で生き返らせたいと思います……
……」

転生、ねえ………？

「どんな世界に転生させるつもりなんだ？……あんまり血生臭いのは勘弁だぞ？」

一応、平和主義者（え？）なんだから……

……今、「何処が」とか思ったやつ……ちょっと裏通りに行くか？

「だ、大丈夫です……… ちょっとバトル的な要素はありますけど……」

……何か、後半部分おかしな言葉が聞こえた気がしたが……… まあいいか。

「そんで？どの世界に送る気だ？」

「ISという世界に送るつもりです………」

「ISってなんだ？」

「ISを知らないんですか？今、ライトノベルとかで有名ですよ」

「いや、知らんし……… 軽くでいいから説明しろよ」

「解りました…… ISと言うのは………」

何か長い説明だからある程度省くが………

インフィニットストラトス

ISとか言う女性しか扱えないパワードスーツのせいで「女尊男卑」の世界に男で唯一ISを扱える主人公を舞台に活躍する学園ラブコメなんだそつだ。

うん、激しく面倒事な気がしてならないなあ……………

「その世界に俺を送り込むと……………」

「他にも魔法少女リリカルなのはの世界や魔法先生ネギまの世界もありますか……………」

「……………どれも嫌な予感しかないなあ……………わかったよ、そのISの世界にするよ」

「わかりました……………それでは、転生するにあたって能力の特典を付けさせていただきます」

「特典か……………何でもいいのか？」

「僕に出来ることなら……………何でも……………」

まああんまり無理難題を押し付けるのも可哀想だし、何個かに絞るかな……………。

「ISをテッカマンブレードにして、資金、身体能力、知識をチートにしてくれ」

「……………それだけでよろしいのですか？」

「ほお……………なら他にもブレードの変身制限解除も付けてくれ……………今はそれぐらいかな」

「……………わかりました……………そしたら、サービスでコレも付けましよう」

イケメン神が手をかざすと、そこに現れたのは青を基調としたロボット……………。

「ラーサ……………」

原作でのブレードのサポートロボのペガスだった。

「付けるのはありがたいけど、これは目立つんじゃないか？」

「それは大丈夫です……………このブレスレットにペガスを収納すれば……………」

イケメンの持つブレスレットが光り、ペガスが中に収納された。
便利だなあ……………。

「あとは、コレを……………」

そう言つて俺にエメラルドに輝くクリスタルを手渡してきた。

「テッククリスタルか……………これが無きやあな……………」

「試しに変身したらどうです？」

そつだなあ……………叫ぶのは恥ずかしいけど、やってみるかね……………。
俺は勢いよくテッククリスタルを上に掲げた……………。

「テック・セッタアアアアッ!!」

テッククリスタルが輝きを放ち、徐々に俺の体を覆っていく。
そして、そこに立っていたのは白と赤を基調とした装甲を持った宇宙の騎士……

「テツカマン、ブレードっ!!」

……ちょっと快感とってしまっただ俺は悪くないと思う……。

「生でテツカマンブレードを見るとなかなか凄いですねえ」

「まあ、俺が好きなアニメだから……それで、解除するときはどうしたらいいんだ？」

「ああ、念じればもとに戻りますよ。」

言われた通りにもとに戻ることを念じたら、体が光り、元に戻った。

「まさか、俺がテツカマンブレードになれるとは思わなかったな……」

俺がそんな風に感慨に耽っていると、イケメンが口を開いた。

「言い忘れましたが、ボルテツカを使うときはエネルギーを喰いますからね？」

まあ、それは仕方無いな……

「では、送りますけど準備はいいですか？」

「ああ、やってくれ……」

「じゃ、次の人生では気をつけて〜」

ガコッ！

俺の足元に床が開き、俺の体が落下していく

「お前、次にあつたら本気で殺すからなああああああ！！？」

こうして、俺の第二の人生は始まった……。あのイケメン、
次にあつたら生き地獄見せてやるからなあ……。！

いきなり死す！？そして授かる宇宙の騎士の力（後書き）

駄文は駄文なりに細々と書かせていただきます

原作開始前（前書き）

連投ですが.....何だ、これ.....orz

酷すぎるにも程がある.....

原作開始前

皆さん、如月 直哉です！俺が生まれ落ちて早くも十五年になりました……。名前も前世と一緒にだったのでそこは嬉しい限りです。

その間に色々なことがありました……。

赤ん坊の頃には満足に言葉も話せず、母親の母乳で過ごしてきたのが懐かしいです……。

あれ？何で涙が出てくる？……。別に精神年齢二十歳過ぎの人間が母乳でしか食事が出来なかったことに泣いた訳じゃないです！ええ、断じて！！

……。話を進めましょう幼稚園から小学生になった頃、同じクラスの子が苛められてるのを目撃しました。

いつの世の中にもああいうのっているんだなあ……。

あ、誰か止めたみたいですね？

でも多勢に無勢で負けそうだし……。

……。面倒なのは御免なんだけどなあ……。

「おい、何してんのぉ？……もしかして苛めえ？？」

「何だよ、如月っ！お前もコイツら庇うのかよっ！？」

いや、苛めかって聞いただけでしょ……。

チラと苛められてた2人を見ると何やら2人とも俺を見て呆然としてた。

……。あれ？？この子らって……。織斑一夏と篠ノ乃菐？

……いやいや、まさかこんなところで主人公とヒロインの一人に
会うなんて……ないわぁ。
何で俺が主人公とヒロインの存在を知ってるかって？……あのイ
ケメン神が俺が生まれた時にこの世界の情報を教えてくれたんだよ
……。
全く、ありがたいやら迷惑やら……。

「おいっ！聞いてんのかよ、如月！？」

「ん？……まだいたの？」

「なっ！？て、テメエッ！！」

バキッ！

「あ………」

「ゲフッ！？」

やっべえ……ついノリで殴っちまった

そこからはもう織斑や篠ノ乃も入り交じった大乱闘の騒ぎになって大変だったなあ…………。

え？それからどうしたって？？

騒ぎに乗じて織斑達を連れて逃げましたが、何か？

「あ、ありがとな……おかげで助かったよ！」

「あ、ありがとう……」

「まあ、気にすんな……成り行きで助けたようなもんだしな」

うん、ホント成り行きだったしね。

「俺は織斑一夏っていうんだ！それでこっちは……………」

「篠ノ乃幕だ……さっきはホントにありがとう」

「いや、そんな畏まらなくていいよ……ああ、俺は如月直哉だ。よろしくな、一夏、幕」

「「ああ、こちらこそ！」」

その日から俺達は毎日つるむ様になった。

それにしても、幕さんや……一夏に手を握られたぐらいで顔赤くしたらこの先、どうなる事やら…………。

一夏達とつるむ内にその姉である「織斑千冬」さんとも知り合えた。

つか、あの人どんだけ強いんだよ……。

高校生だったのに大の大人が数人かかっても勝てないって……。
それに超弩級のブラコンである。

何かしらあることに一夏、一夏と……。

本人は隠し通してるつもりなんだろうけど、俺からしたら引くぐらいの勢いだ……！

まあ弄ったら弄ったで面白いことになりそうだけど…（笑）

（直哉は自分でチートな身体能力を授かってる事をすっかり忘れてます）

後は幕の姉である「篠ノ乃東」。

こっちもこっちで色々とおかしい……。

天才だか天災だかわれて、まず社交的な人間じゃない。
身内や親しい人間にしか興味を持たない……。

性格破綻者、社会不適合者という言葉がしっくりくるが……。

いわゆる変人だ。

俺も人の事は言えないけどね（笑）

だけど、少なくともあの女よりはマシだと自負できるね！

そして、ISの開発者でもあり、「女尊男卑」の世の中を作った張本人だ。

何でこんな世の中にしたのか、理解に苦しむなあ……

けど、そんな俺たちにも別れの時が訪れた。
幕が一身上の都合で転校する事になったんだ……。
その都合と言うのが、幕の姉である、「篠ノ乃束」。
この天災女が原因である。

その時の幕の顔は忘れられなかったなあ……。
一夏と離れたくないという一心で感じだったし……

まあ、一夏も一夏で思うところがあつたんだろう……。幕が去った途
端に俺がいるのも構わずに号泣したんだから……。

俺？……まあ幕が去った事に関しては悲しいけど、また会えるとい
うのを知っているからそこまではいかなかったな。

んで、幕が去ったと思ったら次は俺の番だった。

小学校を卒業したら旅に出るつもりだ。

つっても、俺の場合は自己中な理由だけだな。

年齢的にはともかく、中の人的に考えて中学はないわぁ……。という
理由と色々と世界を見て回りたいという理由だ。

それでもやっぱり一夏は泣いた。

まあ多少は罪悪感はあるが、それでもこれだけは譲る気はなかつ
たが。

両親にも許可を取ってあるわけだし……。

そんで時間は進んで三年後……。

原作開始前（後書き）

次回は設定です

如月直哉の設定（前書き）

設定です

如月直哉の設定

名前 如月 直哉

年齢 15（転生前は二十歳の大学生）

身長 175センチ

体重 65キロ

CV 森川智之

趣味 人の弄れるところを見つけ出し、とことん弄る。

特技 手先が器用なため、繊細な作業を楽々とこなせる事。

備考

子供を助けたところ、イケメン神に誤って殺されてしまったが、イケメンとの平和的な話し合い（と言う名の一方的な虐待）によってISの世界に転生した男。

自らの娯楽の為に子供を殺そうとしたイケメン神をお説教（と言う名の暴力）によって鎮圧し、特典を付けてもらった。

基本的には温厚かつ優しい性格だが、弄れる対象がいたらDSモードとなる。人の好意にはそれなりに敏感で一夏を慕うヒロイン達を生暖かく見守っている。

IS ブレード

待機状態 エメラルドのネックレス

解放時

白と赤を基調とした全身装甲「フルスキン」
というかまんまテッカマンブレード。

タイプは強襲突撃型。

左腕に小型のシールドを装備

原作のテッカマンブレードでは装甲も高く、超音速の機動性を有していたが、イケメン神がIS用に劣化させ、装甲は若干薄いがそれを補って機動性が高く近接戦闘を主体とした戦い方を得意とする。

主武装は肩のファンからランサーを排出し、敵を切り裂くテックランサー。

エネルギーを消費させ、装甲を変形させて敵に超高速で体当たりするクラッシュ・イントルード。

両肩が開き、そこから放つ必殺技のボルテックは威力が高い分、シールドエネルギーを多大に消費し、連発は出来ない。

原作にあった、変身制限はなくなっており時間は無制限となってい

る。

シールドエネルギーは680

サポートIS ペガス

待機状態 青色のプレスレット

ブレードが呼べば待機状態から青と赤を基調としたロボットとなり、ブレードをサポートする。

主武装としては手の指から発せられる無数の小型ミサイル。

ブレードを乗せてブレード以上の機動性を有して飛行する事も可能。ただし、出番は後になる。

如月直哉の設定（後書き）

次は……次は…… I S 学園入学です！

ここで、皆様にアンケートです！

ヒロインを誰にしようか… 作者は未だに考えておりません……その場の勢いとノリでこの作品を作っていますので……

と言うわけで、皆様のアンケート結果でヒロインを決めたいと思います。

自分の腕はまだまだ未熟なので、上手く恋愛描写が書けるか不安で心臓が破裂しそうですが、そこは何とか頑張ります。

と言うわけで、アンケートお待ちしております。

第一章 IS学園入学（前書き）

駄文の完成です！

色々と言いたいたいこともあるでしょうけど、生暖かな視線で見守って
あげてくださいm () m

第一章 IS学園入学

皆さん、こんちわ……………ダークな感じですね……………如月直哉です……………

何で前と違ってそんなに元気ないかって……………？
そりゃテンションもダダ下がりですよ！
俺がIS使えるのがバれて日本に連れ戻されてIS学園とかいう訳の解らん場所に来てるからですよ！

しかも……………

「……………#」

門の前に腕を組んで待ち構えてるスーツ姿の鬼もいらっしやるし……………

ブオンツ！ドガアツ！

「どわっ！？あ、あぶねえ……………」

何か俺目掛けて飛来したものがあつたので、反射的に避けた。
何だこれ……………って出欠簿じゃねえかつ！
しかもコンクリの壁に刺さったまんまだし……………。

「ちっ……………##」

しかもあからさまに舌打ちして、笑顔のまま青筋増えてるし……………
仕方ない、観念しよう……………

「やつほ！久しぶりっすね……千冬さん^{フランド}」
ガスッ！

「……笑いながら殴るのは如何なものかと……」

「お前が変なこと考えなければ殴りはせん」

……この人はいつの間に読心術なんて芸当出来たんだろう……

「まあ何はともあれ、お前……この3年の間何処で何をしていた……？」

「……言わなきゃダメ？」

「素直に言えば説教は無しだが？」

「ん……」

「そこで悩むか、普通……？」

とは言え、言っているものかなあ……。
まあいつか……別に困るわけでもないし

「いやあ、世界の最果てまで行ってまして……」

「何処の事を言ってるんだ……まあ、言いたくなければそれで構わ
ん」

……言えるわけないよなあ……アフガニスタンで戦争屋相手に

大暴れしてたなんて……

まあ、それはそれとして…

「千冬さん、何でこんなトコにいるんすか？」

「決まってるだろ……私がこのIS学園の教師だからだ！」

……教師？この人が？……家事が一切出来ずに自分の身の回りの事を全く気にしない、嫁の貰い手が全く無いこの「女としてそれはどうなんだ」と言う疑問を真っ向に受け止めても余裕綽々のこの人が……教師！？

「……………」

「な、なんだ……その世の中に絶望した的な目は……」

いや、だって……

「それは流石に嘘でしょ……千冬さん、遂に嫁の貰い手無いからってそんな虚妄に走るなんて……！」

「……………お前が私の事をどんな風な目で見てるのか、よくわかった……………だが、まごう事なき事実だ」

神は死んだ……………orz

「それと、ここでは私のことは織斑先生と呼べ」

「わかった、織斑（極度のブラコン）先生」

スパアンツ！

「私は身内の事でからかわれる事が嫌いなんだ……」

「いてて……からかわれるネタをたくさん持つてる方が悪いでしょうに……」

「ほお、まだ足りない様だな……」

千冬さんが出欠簿を振り上げようとするが、俺は手で制する。

「まあまあ、落ち着いて下さいって……弟を溺愛する余り、それをネタに×××しちゃう織斑先生？」

「……………何で知っている……………／／／」

「企業秘密　さて、それじゃ、行きましょうか？」

俺は真っ赤になって悶えてる千冬さんを放っておいてIS学園に足を運んだ。

そっぴや、一夏もここにいるんだっけか……………いやいや、面白くなりそうだし！

そして、教室前に千冬さんに連れられてきた。
でも、クラスメイトって女ばっかなんだよね……。居心地悪そう
…………。

「では、私が先に入るから呼ばれたら入ってこい」

「りょーかいつす」

教室の中に千冬さん、いや織斑先生が入っていった。途中、「ゲエッ！関羽！？」的な台詞が聞こえ、それを黙らせる為になにかを叩く音も聞こえたが、気にしないことにする。

さて、インパクトある自己紹介しようかね…………

「もう一人、転校生がいるのでな…………入ってこい！」

おや、お呼びがかかったな…………。

さてさて、行くかな…………

ガラガラッ！

「えっ……………」

「うそ……………」

「わああ……………」

等々、黄色い声が聞こえてくる。
それもその筈！だって今の俺の姿は……………。

「やあっ！ミッ　ーだよっ！よろしくねっ！！」

あの某ウォルトさんで有名なミッ　ー　スだから！（ちゃんと声も変えています）

「ハアアア……………」

スパアンツ！

「痛いなあ……………何をするんだい！？」

「ふざけるのも大概にしろ！お前は真面目に自己紹介も出来ないのか！？」

「至って真面目なのに……………よっと」

仕方ないので、被り物を取る。

あ、一夏だ！何か呆然としてるけど……………

あれ？？アソコにいるのは幕かな？

髪型も昔と変わってないねえ……………姉があんななのに妹に関して
は至って真面目……………。

遺伝子の不思議だね！

「おい、授業の時間もあるんだ！早く自己紹介しろ」

「ああ、はいはい……………皆さん、初めまして。如月直哉です。世界で2人目の男のIS操縦者とかで紹介されました！趣味はとあるブラコンを弄ることと、読書です。

その織斑一夏と篠ノ乃幕とは昔馴染みなので皆さん、よろしくお願ひします」

最後は眼鏡をかけた童顔巨乳の先生にウインクする。

「はううつ！？／／／／／」

うん、至って真面目な自己紹介だな！

……………織斑先生が頭抱えてるけど、気にしない方向で！

さて、これからの学園生活が楽しみになってきたかも……………！

「……………もういい、如月は織斑の隣の席だ……………時間も無いから早く座れ」

「はい、それじゃ……………」

てなわけで、一夏の傍に近付くとまだ呆然としている一夏がそこにいた。

いつまでも呆けてたら……………

スパアンツ！

こうなるわなあ……………。

「ボケツとして無いで早く授業の準備しろ」

「つつつ……わ、わかったよ千冬姉……」

スパアンツ！

「織斑先生だ、馬鹿者」

ん………やっぱ生で見る漫才は違うね！

まあ後で一夏に色々と聞かれそうだから、覚悟はしておくかね………

第一章 IS学園入学（後書き）

次回はセシリア登場です！

アンケートの方はまだ受け付けてます！

イギリス代表候補生セシリア・オルコット（前書き）

連投です。

色々突っ込みたいところは満載ですが、生暖かい目で見守ってください

イギリス代表候補生セシリア・オルコット

皆さん、こんにちわ！

前のダーク状態から何とか復帰した如月直哉です。

ですが、今は別の問題で頭を抱えています。

その原因は……………

「ちょっと！聞いてますの、貴方！？この私がISの知識を無知な貴方にお教え差し上げようというのに……！」

そう、このドリル女……………イギリス代表候補生の「セシリア・オルコット」がキーキー金切り声を上げて喋ってるからだよ……………。

何でこんな事になったかって？

それは数時間前まで時間は遡るのだが……………。

「おい、直哉！久しぶりじゃないか！」

「よう、一夏……………相変わらず間が抜けてる顔してるなあ！」

「お前の口の悪さも相変わらずだけどな……………」

自己紹介が終わって一夏の隣の席に着いたら向こうから話しかけられた。

全く、変わってなくて安心したよ……………ん??変わってないってことは…………

「ちょっといいか？」

そんなことを考えてたら俺達に声がかかった。

「……………箒？」

一夏、その間はなんだ？

ひよっとして思い出せなかったのか？

髪型も昔と何ら変わってないのに……………。

体型は……………女になったね、箒……………。

「どうしたんだ、直哉は…………？」

「さあな……………屋上でいいか？」

「お、おう……………」

俺が箒の体型の謎を考えてる内に2人は屋上に行ってしまった。

……………何だよ、つもる話なら参加させるよなあ……………。
とか考えながら俺は2人の後を追っていった。

屋上に向かった所、2人は無言のまま対面していた。（直哉はコッソリと扉に隠れて様子を伺ってます）

「……………」

「……………」

（何か喋れや、初々しい中学生カップルじゃないんだから…………）

俺が内心で2人にイライラしていたら、一夏に動きがあつた。

「あ……………久しぶりだな、幕。でもすぐにわかつたよ」

「な、何故だ…………？」

（嘘つけや、お前声かけられてちよつと黙ってたじゃん!？）

「髪型も変わってないし、忘れるわけないだろ……………お前は俺の……………」

（おつ！何だ何だ？いきなりコクるのか？お兄さんはそう言うの大好きだぞ？幕もスngoイ期待の目で見てるし……………）

「幼馴染みだからな！」

ゴンッ！（直哉が扉の角に額を打った音）

「ん？何か聞こえたぞ？」

（そ、そうだった……あのバカ、某闇の皇子様と同等かそれ以上の鈍感だった……）

「そ、そうか………」

（あゝあ、箒もめっちゃ残念そうにしてるし………何でそこだけは成長して変わってなかったのかなあ、一夏は………）

「……………」

「……………」

またもや2人に沈黙が走る。
だから何か言えって……！

「……………そ、それにしても箒、剣道で全国大会優勝したんだってな？」

「な、何でそれをつ！？」

ようやくと一夏が口を開いた。
にしても、全国大会優勝かあ……………世界旅してたからそういう情報は疎くなってたなあ……………。
およ？箒も顔真っ赤にしてるし……………。

「いや、新聞読んで知ったんだ。」

「何故新聞なんか読んでるんだ！」

いやいや、箒さん？

それは芸人真つ青の無茶ぶりだぞ、それ？

あ、いっけねえ……そろそろチャイム鳴るわ！

俺は2人にこれ以上進展はなさそうと読んでこの場を後にした。

そして、授業中の事だ。

山田先生が教鞭を振るい、ISの基礎知識に関して講義している。

正直、眠くなるが……………

「……………」

背後に控えてらっしゃる鬼（超弩級のブラコン）が監視してて眠るに寝れない……なに、この地獄……………？

しかも背中にビッシリ視線感じるし……………。

……仕方ない、後々めんどくなりそうだから聞ってるフリしとくか……。

「ここまでで何かわからないところがありますか？」

ここで質疑応答の時間かな？

つか、一夏の奴……頭から煙出てるけど、大丈夫なのか？

「はい、山田先生！」

ここで一夏が手を挙げた。まあ解らなかつたら聞けつて授業の冒頭に言ってたもんな。

「はい、織斑君！どこか解らないところ、ありましたか？」

山田先生は頼られてるのが嬉しいのか、ちょっと上機嫌だ。

んゝ……そんなににこやかにならんでも、と思うのは俺だけか？

「全部、わかりません……」

「え………？」

なぬ？？

「ぜ、全部、ですか………？」

さ、流石にその答えになるとは……俺も予想外だったなあ……。

スパアンツ！

とか何とか考えてる内に織斑先生の出欠簿が一夏の頭に落ちた。

「織斑、入学前に渡された参考書を見てないのか？」

「……………古い電話帳と間違えて捨てました」

スパアンツ！

うわあ、2度目の出欠簿アタックだ……………。

地味いに痛いんだよな、アレ……………。

「そこで他人事みたいな顔してる如月！」

「え？俺？？」

何か知らんけど、俺も指名された。

ご指名は勘弁なんだけどもなあ……………。

「お前は参考書を読んだのか？」

「読むわけ無いでしょ？あんなクソめんどくさいもの」(即答)

ブオンツ！バシィツ！

「いきなり出欠簿で人の頭をパンパン殴るのはどうかと思いますけどねえ？」

「必読と書いてあったのに何故読まなかったんだ？」
ギリッギリッ…ギリッギリッ…

出欠簿を掴む力と振り下ろされる力が拮抗している。つか、軍隊形式でやられてもなあ…………。

「ていうか、山田先生が困ってるから早いとこ進めません？」（ニコニコ顔で力を入れている）

「お前の頭に振り下ろすまでは進めんよ？」（こちらも笑顔だが、額に青筋をたてている）

やれやれ、仕方ないなあ…

「（小声）……織斑先生が高校の時にやらかした失敗談、皆に聞かせましようか？」

「さあ、山田先生！早く進めようか！」

「えっ！？は、はい……………」

いやあ、お願い（脅迫）ってしてみるもんだね！
ん？？一夏、何聞きたそうにしてんの？

後で教えてあげるから今は授業に集中しなつて！

とまあ、そんなことがあった次の休み時間の事。
俺、一夏は教室でダラダラと駄弁ってた。
そんな時……………

「ちよつとよろしくて？」

「ん？」

「ふわあああゝ……………」

俺達が振り返ると、そこには金髪ロールの女が立っていた。

なあんか、見下されてる感満載だなあ……………。
知ったこつちやないけどな

何処の国に行ってもISのせいで高圧的な女が多かったが、ここでもそんな感じっぱいなあ……………。

「一夏、ご指名みたいだぞ？」

「いや、俺は知らないけど…………直哉じゃないのか？」

「俺にこんなドリル女に知り合いはいないぞ？」

「失礼ですわね！誰がドリル女ですか！」

誰って……………そりゃねえ……

「俺たちの前方1メートル内にいる金髪の偉そうに突っ立ってる君
だけど？」

俺は懇切丁寧に皮肉で答えてあげることにする。

正直、この手の類いの人間に関わるとめんどくさいことこの上ない
からである。

「まあ！なんですよ、そのお返事は？私に声をかけられるのも光栄
なですよ？……それ相応の態度と言うものがありましたよ？」

あゝ、やっぱりめんどくさい類いの女だわあ……。
シカトこいて寝ようかなあ……。

「悪いけど、俺達君が誰なのか知らないんだけど？」

「同じく。」

「私を知らない！？この「一夏、俺寝てるから授業始まる前に起こ
して」なっ！？」

俺はそのまま寝る態勢に入ろうとするが……。

「このセシリア・オルコットを知らないっ！？イギリス代表候補生
であり、入学主席のこの私を！？」

「おお！全く知らん！」

「ZZZ……ZZZ……」

「相変わらず寝るの早いなあ……おい、直哉？寝る前に教えてくれ！」

「……何だよ、寝に入りかけたつてのに……」

中途半端に起こされるのは御免なんだけどなあ……。

「代表候補生ってなんだ？」

一夏のそれを聞いて回りが騒がしくなり、俺の眠気が完全に醒めてしまった。

ていうか、一夏……。

「それぐらいは自分で調べろって……まあ、いつか……国を代表するIS操縦者になれるかもしれない奴らの事だよ。ま、要するにエリート（勘違い）だよ。俺は知ったこっちゃないけどな……」

俺はセシリアに向き直り、質問した。

「んで？……そのエリート（勘違い）イギリス代表候補生が俺達に一体何の用で？」

「本来なら私達選ばれし人間と貴方達のような人間がクラスを同じになること事態が奇跡……幸運なのですよ！」

そんなことを宣いながら指を突きつけてくるセシリア。
つか、人を指差すな……へし折るぞ！？

「あゝはいはい、よかったよかった……じゃ、そういうことで」

話すのもめんどくさいので強引に話を切り上げようとしたのだが、向こうは聞かずに今度は一夏に話しかけていた。

「大体、貴方ISについて全く知らないくせによく、この学園に入れましたわね？唯一……いえ、2人でしたわね？少しくらい知的感觉させるかと思ったのですが、どうやら、見込み違いの様でしたわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが……」

一夏、律儀にそんなめんどい相手しなくてもいいのに……。

「ふん………まあでも、私は優秀ですから貴方達のような人間にも優しくしてあげますわよ？泣いて頼むのであれば教えて……」

「なあ、直哉？ISの知識に関して放課後、教えてくれないか？」

「ええええええ……」

「そんなめんどくさい顔しないで頼むよ……」

「………今度のメシ、お前のゴチな？」

「わかったよ、好きなの頼んでいいから……」

「んじゃ、教えてやるよ」

俺達そのまま教室を出ようとしたのだが……。

「ちょっとお待ちなさい！」

まためんどくさいのが絡んできた……。
ここで冒頭に戻る訳なんだが……。

「めんどくさいなあ……詰まる所、お前さんは優秀でエリートだから泣いて膝まずいて教えを乞わせようとしてるんだろ？
そう言うのは余所でやってくれ……」

俺はめんどくささ100%の顔で言い放ったが、セシリアはそれが
気に入らなかったようだ。

「なっ！？あ、貴方は入学試験で唯一、教官を倒した私にそんな口
を……！」

「あ、それなら俺も倒したぞ？」

横から一夏が口を挟む。
へえ、教官倒したんだ……。

「やるじゃん、一夏」

「でも、アレを倒したと言っているのか？……でも、直哉はどうだ
つたんだ？」

「いや、俺入試すら受けてないし……」

「は……？じゃあどうやって入学したんだ？」

「とある国でIS使ってるのバレて3日前にそのままこっちに強制
連行だよ。」

「……………そっか、お前小学校卒業して旅に出たんだもんな……………」

俺達がそんな話しに花を咲かせていると顔を俯かせ、肩を震わせているセシリアの姿が目に入った。

「……………ただ一人、教官を倒した、ねえ……………大方、女子の中でつて事かねえ？……………笑える才チだなあ……………」

「くっ！」

いやいや、そんな屈辱かつ羞恥に染まった目で睨まれても……………

そんな時、休み時間終了のチャイムが鳴り響いた。

「は、話の続きは、ま、また改めて……………よろしいですわね!？」

「いや、よろしくないし忘れるから」

出来れば2度と関わらないでくれ……………おもに俺の精神的な疲れのために……………」

織斑先生の授業になって俺のそんな願望は脆くも崩れ去ることはまだこのときの俺は知らなかった。

イギリス代表候補生セシリア・オルコット（後書き）

次は決闘まで書けたら書きたいなあ……………。

アンケートもまだまだ募集中です

クラス代表決定前の出来事（前書き）

またもやグダグダです……色々と突っ込みたいところは満載ですが、
生暖かい目で見守ってください

クラス代表決定前の出来事

「あ、貴方っ！私の国を侮辱する気ですのっ！？」

「初めに侮辱したのはそっちだろ！？」

一夏とセシリアがギヤアギヤ罵り合ってる……。つか、人の近くで喚かないでくれ……………。

どうも、IS学園何ぞに入れられて気分&テンションダダ下がりの如月直哉です……………。

つか、何でこんなことになったんだろ……………？

3限目の授業が始まる前に織斑先生が突然こんな事を宣った。

「ああ、言い忘れていたが一月後に行われる「クラス対抗戦」の代表と副代表を決めようと思う。

代表者と言うのは代表戦のみではなく生徒会会議や委員会の出席、

まあ所謂クラス長の事だ。

副代表は代表者の補佐を行う者の事だ。一度決めたら変更は出来んからな？

よく考えて決めろ！」

なんて事を言ってきた。

まあ、俺はそんなもん面倒だからやるつもりなんてないけど………。

「はい！私は織斑君を推薦します！」

「あ、私も！」

「つてええっ！俺！？」

哀れ一夏……………。

ある意味で客寄せパンダみたいなモンだから面白がつて推「私は如月君を推薦します！」っ俺もかいっ！？

「ふむ、推薦者は織斑と如月だな……………他に誰かいなか？」

今、明らかに織斑先生の顔が愉しそうだったぞ！？

……………ちくしょう……………明日の朝、楽しみにしてるよ？（ちなみにこの時、千冬は何か悪寒を感じ、密かに身体を震わせたという……………。）

バンッ！

「待つてください！納得がいきませんわっ！」

俺が織斑先生に対して軽い意趣返しを考えると、机を叩いた音と同時にそんな声が聞こえてきた。

……先程、散々喚きまくって惨めに撤退していったドリル女ことセシリア・オルコットだった。

……まあためんどい事にならなきゃいいけどなあ……。

「そのような選出、私は認められません！男がクラス代表なんて恥さらしにも程がありますわ！

このセシリア・オルコットにその様な屈辱を味わえと仰るのですか！？」

（いや、ならお前が立候補しろよ……。
喜んで譲ってあげるから）

なんて思った俺は悪くないと思う……。

「クラス代表は実力の頂点に立つものがやるべき事……つまり、代表候補生である私がやるべき大役ですわ！」

（だから立候補しろって……俺だってこんな面倒な事は御免なんだから……）

「それに、文化も後進的な国に滞在しなければいけないことは私にとつては耐え難いことですわ！」

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ……世界一料理が不味いので何年覇者なんだ？」

セシリアの金切り声に被さって一夏の声が聞こえてきた。

あゝあ、ホントの事言っちゃったよ……。

とまあ、ここで冒頭に戻る訳なんだが……………正直、大元を辿ればそこで愉しそうにニヤついてるブラコンがいけないんじゃないか……………？

つか、止めるよ？山田先生がアワアワ言ってるぞ？

バンッ！

再度机を叩く音がして、そちらを見るとセシリアが一夏を睨んでいた。

その目は自国を侮辱された悔しさと怒りにまみれていた。

「決闘ですわ！」

あゝらら、一夏のやつ地雷踏んづけたなあ……………。

ま、他人事だし一夏の自業自得だから別に……………。

「そのこの如月とか言う男共々、纏めて潰して差し上げますわ！」

……………飛び火が此方まで来たし……………。

まあた、面倒な……………。

「……………俺、特に関係なくない？つか、明らかに巻き込まれたクチだよね？」

「今のセシリアに何言っても無駄だと思うよ？」

俺の隣にいたクラスメイトAさんが俺に同情するかのよう肩を叩いた。

「上等じゃないか！そっちの方が分かりやすくていいぜ！」

一夏も一夏で単純に乗せられるなよ……………。
何か、昔よかバカになってる気がするんだけど？

「まあ、やるからにはやってやるけど……………一夏はともかく俺はどのくらいハンデいるんだ？」

俺が独り言で言ったのが聞こえたのか、セシリアが尊大に言い放った。

「あら、私に勝てないからっていきなりハンデの要求ですの？」

……………何か、勘違いしてるみたいだなあ……………。
でも、弱いものいじめも好かんし言ってやるか。

「いやいや、お前ごときならチョロいから俺がどれだけハンデ付けようかって……………」

それを言った瞬間、クラスの全員（一夏と箒を除く）が一斉に笑い出した。

「き、如月君……………本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのつてもう昔の話なんだよ？」

……………まあ好き勝手言ってくれちゃって……………#

「まあ、いるかどうかはこれ見て判断してくれ」

俺は胸元に引っ提げているデック・クリスタルISを織斑先生に放り投げた。

「……………何のつもりだ？」

「俺のIS使用時間を見ればわかるんじゃないか？…………俺の言ったことがどれだけの事か、ね…………」

「……………わかった、これは預かる。私が戻るまで各自、自習だ！」

そう言つて織斑先生は山田先生と教室を出た。

……………鬼の居ぬ間に睡眠学習でもしようかね……………

数十分後、織斑先生と山田先生が戻ってきた。
2人とも、顔面蒼白だけど……………。

「オルコット……………悪いことは言わん、ハンデを付けてもらえ。」

「なっ！？お、織斑先生っ！？」

どうやら俺の言った意味が正確に伝わったらしい。
まああの使用時間見たら当たり前か……………。

「如月相手じゃどう足掻こうがお前では勝ち目が一切無いから言っ

てるんだ」

「そ、そんな……お、お断りますわっ！まだ戦ってすらいらないのに！」

「……一応、忠告はしてやったからな……後は自己責任だ……
……如月、後で話がある……放課後にアリーナに来い。」

俺のISを放り投げて織斑先生はそう言った。

……放課後つて一夏の勉強あるんだけど……まあ、いつか……
……一夏も誘ってやれば……

そんなことを考え、俺はまた眠りについた……

（余談だが、寝ている直哉の頭に出欠簿が振り下ろされたのは言うまでもない）

クラス代表決定前の出来事（後書き）

次回は模擬戦です……………

相手は……………おっとっと！まだ言えません（笑）

次の話で千冬と真耶の顔面蒼白の意味がわかると思います。

アンケートはまだまだ募集中ですので、気軽に答えてみてください。

模擬戦兼、入学試験開始！そして……（前書き）

おはようございます m (_ _) m

仕事の休憩中に投稿します。

戦闘描写、ヘッタクソだなあ………

模擬戦兼、入学試験開始！そして……

織斑先生に呼ばれ、アリーナに向かった俺達

「なあ、俺も一緒にいいのか？」

今回は一夏も御一緒です。勉強教えてやる約束だったけど、俺が呼び出し喰らったと言うのもあり、勉強が出来なかったのでせめてもの代案という訳じゃないですが、付いてきてもらうことにしました。

「いいんじゃないか？……もしあだこうだ言ってきたら俺が黙らせるから」

「……昔から千冬姉にズバズバ言えるのってお前か束姉ぐらいだよなあ……」

変なところで感心しないでくれ、一夏……。そんなことを話していたらアリーナに着いた。そこで待っていたのは……

「遅かったな、如月………！」

ISスーツを身に纏った織斑千冬……否、第1回IS世界大会優勝者であるブリュンヒルデ（戦乙女）と山田先生がいた。

「……何故織斑がそこにいる？……如月以外は呼んでいないぞ？」

「別にいいじゃないすか……放課後は呼び出し喰らってコイツに勉

強教えること出来なくなったんすから……」

一応、俺は一夏がここにいる理由を話した。
元はと言えばおたくらのせいでしょうに……。

「それに、これからの行動を考えれば一夏の勉強にもなると思いますが……」

「……まあ、いい………如月、ISを装着しろ……私が入学試験を兼用して相手になってやる」

兼用って………ただ俺への意趣返しを理由にしているとしか聞こえないんだけどなあ……

「……はあ、わかりましたよ………てなわけで一夏、山田先生と一緒に観戦してお勉強だ」

「え………ど、どう言うことだよ………!？」

「鈍いやつぢゃなあ………今から俺と織斑先生が模擬戦やるからそれ見て勉強しろって事だよ!」

昔っから変なところで二ブチン野郎だったが今もそれは変わらずだなあ……。

良かったのか、悪かったのか………ちょっと複雑な気分だよ……俺は。

「わ、わかったよ………けど、千冬姉相手にやれるのか?」

「さあ?………やれるとこまではやってみるけど………」

織斑先生に向き直り、言い放つ。

「負ける気は更々無いね！……テック・セッタアアアアッ！
！！」

そして、テック・クリスタルを上に掲げて叫ぶ。

俺の身体を緑色の閃光で包み込み、装甲が纏われる。……閃光が止み、そこに現れたのは白と赤の装甲に身を包み肩の装甲が大型化しており、全身が鋭角化し攻撃的な印象を強くした騎士がいた。

「テツカマン・ブレードっ！！」

俺は名乗りを挙げて織斑先生の前に降り立った。

「……………それが、お前のISか……………まさか全身装甲フルスキンとはな……………」

「ええ、俺のIS（相棒）のブレードです……………」

俺は肩のファンからランサーを排出し、それを連結させて構えた。

「では、私も行くぞ！」

織斑先生もISを起動させて身に纏った。

あれは……………打鉄か。

お互いに近接仕様ってところかな……………。

「待たせたな……………さあ、」

「始めますか！」

ガギインッ！

互いに接近し、ランサーと刀がぶつかり合った。

SIDE 一夏

「す、すげえ……………」

俺は2人のぶつかり合いを見て感嘆の声しか出せなかった。隣にいる山田先生も同じのようだ……………。

「き、如月君が織斑先生と互角に戦ってるなんて……………」

そう、あのモンド・グロツソ優勝者である千冬姉と俺の親友の直哉が互角にやりあっているのだ。

普段はふざけた態度をとり、面倒なことが大嫌いな直哉なのに……………。

「……………戦いたい……………」

俺は自分でも気付かないくらい見入っていて無意識に呟いていた。
直哉と戦ってみたい！

今までこんな風に考えたことなんてなかった！
でも、2人の……直哉の闘いを見て思ってしまった……

直哉と戦いたい！

そして、隣に立って共に戦いたいと………！

S I D E 一 夏 e n d

S I D E 千 冬

強い………！

ISの使用時間からしてかなりやれる奴だとは思っていたが、何合か斬り合ってみて実際にここまでやるとは思っていなかった！

私とて世界大会で優勝した誇りがあつたから慢心していないと言え
ば嘘になるが、くっ！……中々楽しいぞ！

「どうした！直哉っ！？……もつと打ち込んでみる！！」

「……………」

装甲で隠されているせいか、表情が窺い知れないがやつもこう思っ
ていたら……！

ガキイツ！！

っ！！得物同士がぶつかったと思つたら私の刀の方が破損し、首筋
に直哉の得物の切っ先を突き付けられた……………！

くっ……………私の、負けか……………。

「この程度すか、ブリュンヒルデ？」

え……………？

ふと、直哉の冷めた声が響いた。

S I D E 千冬e n d

SIDE 直哉

何と言うか……正直な話、拍子抜けだ……。
世界最強と呼ばれていた千冬さんとやった結果だ。

動きが正直過ぎる……。

いくらモンド・グロツソとは言えスポーツ大会の粋をでなかったか……。

これならアフガンの戦争屋の方が動きがよかったな……。
まあ千冬さんに関してはそれが原因じゃないだろうな……見たところ、打鉄が千冬さんの動きに付いていけてなかったように見えたしな。モンド・グロツソで使用していた「暮桜」ならもっといい勝負が出来たんだろうけど……。

「打鉄程度で俺とやりあえると思われてたら心外すね……」

「……………」

「だんまりかよ……まあいいんすけどね……」

俺はISを解除して千冬さんに近付いた。

「あ……………」

俺に反応した千冬さんが弱々しく声をあげた。

……………少し虐めすぎたかな

「スンマセン……………偉そうなこと言って……………でも、」

「え……………」

俺は千冬さんに手を差し伸べ、笑ってやることにした。

「入学試験はこれで合格つすよね？」

「っ／／／……………あ、あぁっ！」

何か頬を赤く染めてるけど……………何か、フラグ立てちまったかねえ……………

しかも……………何か一夏の俺を見る目が何か妙だな……………面倒事の予感がしてならない……………。

「直哉、1つ聞かせてくれ……………どうして、そこまで強くなれたんだ……………」

聞かれるとは思ったけど、言いづらいなあ……………。

うん、はぐらかすか……………。

「……………俺のいた所じゃ命のやり取りなんて日常茶飯事でしたから……………」

千冬さんはそれを聞いて黙り込んでしまった。

まあ、殺しはしてないけどね俺は……………。

さて、そんな一夏に感想を聞きにいくかな
と、その前に……………。

「何か、ネズミでもいるんですかね？……………さつきから匂ってしょう
がないなあ……………」

織斑先生は何の事が解らなかったみたいだが、俺は模擬戦中に気配
を感じていてある方向に向かって叫ぶ。すると、何かの気配がして
現れた。

「……………いつから判ってたのかしら？お姉さん、気配は完全に消し
てたつもりんだけど？」

現れたのは水色の髪に扇子を持った女だった。
扇子には驚愕の文字が描かれている。

……………つか、某幸運男の背中じゃないんだからよ……………

「織斑先生との模擬戦最中だよ……………何か窺うような気配を感じたん
でな」

「……………楯無、お前か……………」

「すみません、織斑先生……………でも、先生が負けたのには驚きました
……………」

どうやら織斑先生の知り合いみたいだな……………。
ま、俺にはあんま関係ないか……………。

「如月、他人事みたいな顔してるがコイツはウチの生徒会長だぞ」

「……………あれま……………」

関係、大有りみたいだわ…

「フフ、よろしくね……………如月直哉君……………」

なあんか、妖艶に微笑まれてもなあ……………？
面倒事の匂いしかプンプンしないわあ……………。

俺の平穩は何処へ？？

模擬戦兼、入学試験開始！そして……（後書き）

次回は部屋割り／＼代表戦前まで書けたらいいかなあ／＼

何て思ってます……………。

直哉は千冬相手にフラグが立ちました（笑）
でもまだヒロインは未定です

一夏と織斑先生からの頼まれ事（前書き）

御詫び

前回、代表戦前まで行こうかという事でしたが、今回は部屋割りまです。

そして今回はいつも以上にグダグダ＋駄文です
かなり批判的な意見もあるかもしれませんが、そこは生暖かい気持ちでお願いしますm（――）

一夏と織斑先生からの頼まれ事

「はああああ……………」

俺は一夏たちと別れ、1人で屋上に来ていた。

フェンスに寄りかかりながらつい先程まで起きた出来事を頭の中で反芻し深あい、深あい溜め息を吐いた。

「面倒な事、引き受けちまったなあ……………」

そして面倒臭そうにぼやいた。

アレから、俺に何があったのか…………それは模擬戦後まで時間は遡る。

「直哉っ！俺を鍛えてくれっ！！」

モニター室に戻ってきた俺に土下座をせんばかりの勢いで一夏が俺

に頭を下げてきた。

いや、何となく面倒なことが起きそうとは思ってたけどさあ…………

「……………つか、何で俺？」

「そりやお前の強さを見てたからに決まってるだろ！」

……………どこぞの格闘漫画じゃねえんだから……………

「つか、俺だって一般の生徒だぞ？……………他を当たって……………」

「お前ならオルコット如き、余裕で倒せるだろう？……………それに、私にも勝ったんだからそれぐらい出来る筈だろう？」

横からしゃしゃり出ないでくれ……………織斑先生……………

「それだったら織斑先生が教えてやればいいんじゃないですか？……………言っちゃ悪いけど教師は困ってる生徒を助けるのは常識でしょ？」

「スマンが、私も暇ではないのでな……………それに、教師として依怙贖する訳にもいかん」

これは織斑先生の弁。

「私も織斑先生と同じですね。」

これは山田先生の弁。

「ん……………お姉さんとしては協力してあげてもいいけど、私はその子よりも君に興味あるなあ……………」

これは更識会長の弁。

つか、俺なんぞに興味って大概変わってるなあ…………一部を除いて、正論なので何も言えんよ…………。

「…………俺だって全てわかる訳じゃない…………それに、お前の戦闘スタイルがわからん以上は手の出しようがないしな…………」

ぶっちゃけ、面倒臭いというのが其れなりの理由を占めているが、一応これも理由の1つだ。

下手に俺が手を出して妙な癖をつけてしまったら目も当てられんな…………。

「まずはそいつを確かめてからだな…………ん??」

…………何か、一夏が意外そうな目で見てくるが俺、何か言ったか？

「直哉、面倒臭いとか言いながら結構考えてるんだな…………」

「…………このバカ、誰のせいだと思ってるんだか…………まあいい、一夏…………お前ガキの頃、何か武道か何かやってなかったか？」

確か、昔の記憶通りならコイツやってた筈なんだけど…………？

「あ、ああ…………確かに剣道やってたけど…………受験と生活もあって中学3年間はずっと帰宅部だ！」

「威張って言うなよ…………なら基本ぐらいは出来てるだろうから強引に叩き込んだきゃいいが、問題があるな」

そう、一番重要な問題が……。

「問題とは何だ……？その口振りからして一夏を教える分には問題ないようだが……？」

織斑先生が俺に聞いてきた。……確かに俺が教える分には問題ないがね……面倒臭いけど……。

「俺は剣道の事は全くといっていいほど無知だ。……だから教えられない……」

ブレードになってからはランサーを使うため、それに近い棒術は会得したけど、剣道の事に関しては無知だ……。

「……そうなのか……」

一夏は気を落としたように呟いた。

正直、罪悪感は沸くがこればかりはどうしようもない……。

「……あっ！」

突然、一夏が何かを思い付いたように声を上げた。

何かいい手でも見つけたかねえ？

「筈だよ！あいつ剣道の全国大会優勝者だ！……ちょっと行ってくる……！」

喜び勇んでモニタールームを出た一夏だが……

「……あのバカ、篠ノ乃の部屋の場所を知らないだろうに……」

我が弟ながらバカだ……と疲れたように呟いた織斑先生が妙に印象に残った。

「で、でもっ！篠ノ乃さんに頼むと言うのはいい案だと思いますよ？」

「私はよく判りませんが、剣道の事は剣道を知る人に聞くのが一番というのは確かにそうですね……」

山田先生と更識会長が感心したように言う。

ま、何はともあれ俺はお役御免ってやつだな。

そのままモニタールームを出ようとするが……。

「まだ話は終わってないぞ、如月……」

織斑先生に後ろから肩を掴まれた。

イダダダダッ！！潰れる潰れるっ！！

「な、何すかつ！俺はもうお役御免でしょっ！？」

「まだお前には聞きたいことがある……あのISの使用時間の事だ」

今、そこに触れるかあっ！？

そのまま帰リたかったのに……。でも部屋無いし……

「……………答えてもいいんですけど……………」

俺はチラッと更識会長と山田先生を見る。
織斑先生もそれに感付いた様だ。

「山田君、楯無……悪いがここからは2人で話させてくれ」

「え………で、でも………」

「私も彼に興味あるから聞きたいんですが………」

「………まあ別に聞いてもいいんですけど、間違いなく生きてる事を後悔しますよ?」

俺が2人に殺気を向けると、顔面蒼白になり身体を震わせた。

「そ、そういえば私………仕事が残ってるんでした!」

「わ、私も生徒会の仕事が残ってるんだった………」

2人はそのまま退出した。まあほんの冗談だけどね♪

「あまり2人を脅かすな………そんなに聞かれたくないのか?」

「まあそんなんでもないですけどね………さて、と」

俺は織斑先生に向き直り、真剣な眼差しを向けた。

「これを聞くと、後戻りは出来ませんよ………それでもいいですか?」

「……………わかった」

織斑先生も覚悟を決めたのか、神妙な顔でうなずいた。

「……………わかりました……………まずは俺の秘密から話しましょうか……………」

俺は織斑先生に自分の秘密を打ち明けた。

事故で死んで神にこの世界に転生したこと。

IS自体、神にもらい生まれた頃から所持していることを……………。
まあこの世界がラノベというのは省いたけどな……………

「……………これが俺の秘密ですね……………」

「……………これで納得いった……………お前が時折、私より歳上の感覚がしたのをな……………」

「まあ、実際年上でしたからね……………さあ、どうしますか？」

「……………決まってるだろう……………私の胸の内に収めておくさ」

「……………いいんですか？……………自分で言うのも何ですけど、こんな特異な俺をIS学園に置いていいんですか？」

「私を甘く見るなよ？問題児の1人くらい抱え込むことくらい、造作もない！……………それに……………（どうも、コイツに……………如月直哉に惚れてしまったみたいだからな／＼／＼）」

……何か最後にいったみたいだけど突っ込まない方がいいみたいだな……

「まあ、置いてくれるならありがたいですよ……あ、そういえば……俺の部屋ってどうなってるんですか？」

見た感じ、寮っぽいけど部屋がなきゃホテルでも構わないし？

「ああ、そういえば忘れてたな……一夏にも言い忘れていた」

まあ、話を聞かずに勝手に出てったからなあ……。あのバ力は……。

「一夏の部屋は篠ノ乃と同じ部屋でお前は……／＼／」

何故そこで顔を赤らめるし……何か妙な予感っ！？

「お、お前は私と同じ部屋だっ／＼変更は効かんぞ」

……何処でフラグ立てたっ！？

「……了解です……」

俺は今度こそそのままモニタールームを出ようとしたが……。

「な、直哉……一夏の事なんだが……」

「アイツなら筈が剣道を教えるから問題ないでしょ？」

「……篠ノ乃ではISの事は教えられない……そこはお前が

教えてやってくれ……………」

「……………」

…………… やれやれ、こおのブラコンめ……………

「わかりましたよ、その件に関しては引き受けます」

俺はそう答え、今度こそモニタールームを出た。

そして冒頭に戻る。

「まあ、引き受けたからにはきっちりやってやるか…………… かなりスパルタ式にだな」

俺はそう決意して屋上を後にした。

取り敢えず、一夏に話を通しておくか…………… さて、と……………
そんじゃ行くかな

俺はクラスメイトの1人を捕まえて箒の部屋を聞き、そのまま向か

つたが……

「……………どしたの、これ……」

部屋に来てみると、部屋の前に一夏が正座しており頭にたん瘤が出来ていた。

何が起きたんだろう………

一夏と織斑先生からの頼まれ事（後書き）

セシリア戦まで終わったら一度、キャラ設定を作ろうと思います

1日の終わり（前書き）

連投です！

ヒロインはこの作品を見ている人がわかっているようにあの人になりました。

アンケートにお応えいただいた読者の皆様、申し訳ありません

1日の終わり

「……………なるほど、一夏が勝手に部屋に入ってきてちょうどシャワーから戻ってきた筈と鉢合わせして竹刀でボコボコにした挙げ句、外に放り出して正座させたと……………」

「ああ、そうだ！」

筈はつい先程の出来事を思い出したのか顔を真っ赤にしている。ちなみに一夏は俺達の前で正座中だ。

「まあ八割は一夏が悪いわなあ……………」

「……………ああ、すまなかったな、筈」

「ま、まあわかればいい……………次からは気を付けてくれ」

「さて、と……………次は筈だな……………」

「なっ！？わ、私は悪くないぞ！」

自覚症状無いつても恐ろしいもんだな

「……………あのなあ、いくら一夏が悪いって言っても竹刀でぶっ叩くのはやりすぎだと思わないか？」

「う……………け、けど……………」

「ましてやぶつかったところが悪かったら身体に一生物の傷を残す

「とこだったしな」

「……………」

それを聞き、意気消沈する箒。

これで判ってくれりやいいけどな？

「さ、解つたら箒は一夏に言わなきゃならないことがあるだろ？」

「……………ああ、済まなかったな、一夏」

「い、いや……………俺もノックもしないで勝手に入って悪かったよ」

ま、取り敢えず解決だな。そういえば……………。

「ところで、一夏は箒に剣道の事は伝えたのか？」

「あ、まだだった！」

「??……………何の話だ？」

「ああ、実はな……………」

一夏はつい先程の事を箒に話した。

俺が織斑先生に勝つたと聞いたら口を大きく開けて驚いていたが……………。

「……………話はわかった……………つまりは一夏を代表戦までに出来る限り剣道で鍛えればいいんだな？」

「ああ、ISに関しては俺が教えるから篤は一夏に出来る限りでいいから教えてやってくれ」

俺達が一夏の教育方針について話している傍でポケットとしてる一夏。

一応、お前の事なんだから真面目に聞けよ……………。

「それと、一夏……………言い忘れてたけどお前、篤と同室だからな」

「「へ（え）？」」

いやあ、息があっていいねえ♪

「ち、ちよつと待て……………もう一度言ってくれないか、直哉？」

「まあ、一夏と同室なのが恥ずかしいのはわかるけど決定事項らしいぞ、篤」

「な、ななな……………／／／」

おゝおゝ、顔真っ赤にしちゃってえ……………。

一夏を想う気持ちは変わらずってか？

「い、一夏はどう思ってるんだ……………？わ、私と同室なのは？」

「俺か……………？確かに恥ずかしいけど、篤相手なら気が楽だな」

「そ、そうか……………」

……あんま2人の邪魔するのも気が引けるな、帰るか……。

「んじゃま、御二人さん……後の事は2人で決めてくれ、俺は帰るから」

「あ、ああ………そういえば直哉の部屋は何処になるんだ？」

「………織斑先生と同室だよ………」

「「………」」

2人とも、そんな気の毒に的な視線はやめてくれ……虚しくなるから………」

「んじゃ、また明日な」

そのまま俺は2人の部屋を出た。

俺は織斑先生のいる寮長室に向かい、ノックした。

「ま、待っていたぞ……直哉」

出迎えてくれたのは織斑先生だったが、織斑先生の後ろから見えた部屋の状況が酷かった……。

いや、酷いなんてもんじゃない！

まるで大災害でも起きたかのような惨状だ……。

片付けられない女もここまで行くと自然災害並みだな……。

「お、織斑先生………」

「……昔みたいに千冬でいい………」

いや、そんな哀しそうな目で言わないでくれ………何か罪悪感あるから………」

「わかったよ、千冬さん………それより部屋の掃除しようか………これじゃ俺が寝れないからね！」

「う………す、すまん………」

俺は制服の腕を捲りながら部屋掃除に取り掛かった。千冬さんも申し訳なさそうな顔をしつつも作業に取り掛かった。

数時間後、部屋は何とか片付き俺達は一段落吐いた。

「まさか、1日の最後に部屋の掃除をすることになるとは思わなかったなあ……」

「……………重ね重ねスマン……………」

「別に気にしないでいいよ……………千冬さんも変わってなくて良かったよ」

「そ、そうか……………／／／」

……………やっぱどっかでフラグ立てたかなあ……………

「それで？何か部屋での決まり事はあるのかい？」

「ああ……………」

それから俺達は部屋での決まり事を話した。
にしても……………千冬さんの家事能力に関しては変化無しか……………。
将来、どうするんだかねえ……………。

「千冬さん、ビール貰うよ」

「お前、未成年だろう？」

「今は俺の方が年上だよ」

「全く………一本だけだぞ？」

「ありがとう」

俺は冷蔵庫からビールを一本取り出し、タブを開けそのまま飲んだ。

「ん〜」やっぱ久々のビールは旨いねえ」

「………私にもくれないか？」

「おっと………そうだった」

俺は冷蔵庫からもう一本取り出そうとしたが………

「お、お前の飲み掛けのやつで構わん／／／」

おいおい、それって間接キス狙ってない？

まあ、いっかね？

「はいよ！その代わりもう一本もらうよ？」

「む………仕方無いな………」

俺はそのままもう一本取り出してプルタブを開けて飲んだ。

「……………／／／／」

千冬さんは顔を真っ赤にして恍惚な表情をしながらビールを飲んでいた。

ある意味器用だなあ……………などと変なところで感心してしまったが

……………

「んじゃ、明日もあるからもう寝るよ……………俺、向こうの床使うから」

俺は千冬さんの答えを聞かずにそのまま布団を借りて横になった……

……………

……………どうやら自分が思っていた以上に疲れていたようで睡魔は直ぐに襲い掛かり俺は抵抗もせず眠りについた……………。

その翌朝、俺に天国だか地獄だかよくわからない状況になっているのを寝ている俺が知る由もない……………。

1日の終わり（後書き）

次回は時間を飛ばして代表戦に行こうかなと思います

クラス代表戦開始！（前書き）

更に連続投稿です。

今回は一気にクラス代表戦前までキンクリします。

クラス代表戦開始！

「ん…………ん……………」

次の日の早朝…………いや、明け方の5時か…………。
俺は目を覚ました。

時差ボケでまだ寝てるかと思ったが、どうやらそうはならなかったらしい…………

「案外よく眠れるもんだなあ……………ん??」

「スーツ…………スーツ……………」

……………何故千冬さんがいるし……………ちょっと落ち着いて考えてみよう…………。

確か、昨日は千冬さんにビール貰って飲んでからすぐ寝た。

うん、落ち着いて考える必要なかったな！

でも流石にちよつと焦ったぞ？

まあ不純異性交遊はしてないからその辺は安心できたけど……………。

「ちよおつと無防備過ぎじゃないかなあ……………昔だったら理性イカれて絶対に襲ってたぞ……………」

「……………ほあ、聞き捨てならない台詞を聞いたな……………」

「……………何だ、起きてたんだ？」

「つい先程な……………と言うより起きるのが早すぎだ」

「……………まあそれは人それぞれって事で……………つか、何で人の布団に？？」

「そ、それは……………お、お前が余りにも寒そうにしてたからでなっ！」

「昨日は大部快適に寝れたけど……………？」

「う、うう……………／／／」

何このかわいい生き物……………目え潤ませてこっち見上げられると……………

「思わず抱いちゃいそうだ……………」

「だっ！？……………あうううっ……………／／／」

何か悶え始めたけど……………あれ？……………俺、何言っただ？……………まあいい、起きるとしようか

「俺、ちょっとトレーニングしてくるわ……………」

「いや、でも……………直哉なら私は……………／／／」

どうやら頭ショートしてイカれたようだ。
ま、いつか……………。

俺はトレーニングウェアを持ってシャワー室に行き、着替えた。

「そんじゃ、行ってきますかね！」

寮長室を出て、俺は学園外周をそのまま走った。

……一頻り走って思ったことは、この学園……無駄に広すぎじゃねっ！？と思った。

そのまま走り込み、いい感じで身体が温まった頃には日が射し上ってきた。

取り敢えず、今日はここまでかな……。

そんな感じで代表戦まで過ぎていった。

一夏の出来具合をここで軽く話していこうと思う。

次の日の放課後に一夏と箒が試合をして一夏がボロ負けした。

どうも昔は箒よりも一夏の方が強かったらしいが、今では経験の差が大きく開きすぎてしまい、そんな結果に箒が激怒し、より一層一夏への修練に力を入れたみたいだ。

まあ小声で一夏と2人きりで特訓出来て良かったな、何て言ったら顔赤くしてたけど……

IS関係に関してだが、一夏に専用機が届く様な事を千冬さんが言っていたな。一応、どんなISなのか聞くと機密事項と言われ聞け出せなかった……。

それさえ判れば攻め様はあるんだけどなあ……。

一応、IS関連は知識の方は基本的なことはスパルタ式で叩き込ん

である。

俺自身もそこまで詳しくは解ってはいないが基本的な事は覚えている。

それだけ叩き込んでおけば平気だろう。

後は代表戦まで箒が一夏を徹底的にしごくだけだ。

そんな風に日々は過ぎていき、遂に代表戦当日がやってきた。

やってきたのだが……………

「おい一夏、箒……………」

「何だよ、直哉……………」

「まあ言いたいことはわかるけどな……………」

「なら言わせてもらっけどな……………専用機が当日まで来ないってどうよ?」

ピットに待機していた俺達に届いたのは専用機がまだ来ていないとの知らせだった。

……………これに関しては一夏に非はない。
製作者の問題だ。

確か、IS製作者の名前は篠ノ乃東、箒の姉だったな。
昔から非常識だと思ってたがここまでとは……………

このままじゃ不戦勝かなあ……………と思ったその時だった。

「織斑君！織斑君！織斑君！」

山田先生が走って近づいてきた。

……揺れる双児山に目が行ったのは内緒である。

「山田先生、どうしたんですか？」

「ハアツ……ハアツ……ハアツ……と、届きました！織斑君のISが！」

「「！！」」

それを聞いて一夏と箒がそのまま走り出した。

「あつ！待ってくださいいい！！」

それを慌てて追い掛ける山田先生。

ああ、また双子山が……眼福眼福……。

「何て言ってる場合じゃないか！」

俺もそのまま3人の後を追っていった。

そして、俺が辿り着いた時に目にしたのは『白』一色の機体だった。
……………何処ぞの連邦の白い悪魔か、と連想した俺は絶対悪くないはずだ！

「時間がない、早く乗れ。背中を預けるようにすればいい、ああそうだ……………後はシステムが何とかする」

織斑先生の指示により、そのまま機体が一夏に装着される。
しかし、ホントに白いなあ……………名前も『白式』みたいだし……………。
（この名前を聞いたとき、金色じゃないのかと思って織斑先生に拳骨を喰らったのは余談である……………拳骨した織斑先生の方が人知れず痛がっていたが……………）

おっ！どうやら一夏の準備が完了したようだ。

「箒……………」

「な、なんだ……………？」

「行ってくる！」

「あ、ああっ！勝ってこい！！」

そんな周りが見たら微笑ましいやり取りを箒としていたら一夏は次に俺の方を向いた。

「直哉……………」

「ん？どうした、早いとこいかないとホストのドリル女が待ちくたびれるぞ？」

「わかってるさ……………ただ、これだけは言いたくてな」
「……………？何だよ？？」

「この決闘が終わったら、俺と勝負してくれ！」

「……………まあ、考えとくよ」

「よし……………なら行ってくる！」

一夏はピットを飛び出してそのままアリーナに向かった。

これからクラス代表をかけた決闘が始まる。

果たして勝つのは、一夏か！？それともセシリアか！？
勝利の女神はどちらに微笑むのか！？

それは誰にもわからない……………ただ、神のみぞ知るだけである。

クラス代表戦開始！（後書き）

次は織斑一夏VSセシリア・オルコットをお送りします

対決！白VS蒼（前書き）

どもです！

今回は遂に、一夏とセシリアの対決になります。

相変わらず、戦闘描写は下手ですが……………下手なりに頑張りたい……………。

誰かあ……………私に文才を……………

対決！白VS蒼

「あら、遅かったですね……………てっきり逃げたのかと思いましたわ」

アリーナに飛び出した俺に待っていたのは蒼のISを纏ったセシリアだった。

それも皮肉を込めて……………

「何で俺が逃げなきゃならないんだ？」

正直、楽しみで仕方ないんだけど……………！

たったの数十時間に箒や直哉にしごかれた俺が代表候補生相手に何処までやれるのか……………！

ただ、直哉の扱きだけは地獄だったけど……………。

「決まってますわ！私が勝つんですもの……………それに恐れをなして逃げることは恥じゃないですよ？」

「言ってくれるな……………俺だってこの日まで遊んでいた訳じゃない！」

そう、箒達に感謝してもし足りない……………！
その成果を今、ここでぶつける！！

「引く気はなくなってます？」

「くどいぞ！来るならさっさと来いよ！」

「そう、なら……………」

ビシュンツ！バシッ！

「ぐあっ！」

「お別れですわねっ！」

セシリアのISの持つライフルで撃たれ、先手を取られた！

「さあっ踊りなさい……………！私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲『ワルツ』で……！」

それと同時にセシリアの背部に装着されたビット兵器が射出され、俺に襲いかかってきた！

「くっ……………！」

彼方此方を飛んでくるビットに翻弄されて中々セシリアに近付けない！

（けど……………楽しい！）

俺は自分の内側から溢れ出る高揚感を抑えきれなかった。

自らISを操る実感……………

ISを使って空を飛ぶ感覚

そのどれもが新鮮で楽しいと言っ感覚があった。

SIDE 直哉

「織斑君、凄いですねえ…… ISに乗るのが二回目とは思えないくらいです……」

山田先生は素直に一夏の機動に感心するが……。

「あのバカ……」

対する織斑先生は苦々しい顔で一夏の様子を見ていた。

「…… やれやれ、あのおバカは……」

まあ俺も同じ感想だったりもするけど……

「え？？ど、どういう事ですか？」

まあ山田先生は一夏とは付き合いが浅いからわからないんだろう……。
……。
箒も心配そうに一夏を見ていた。

「ああ、状況が悪いのに浮かれてるからですよ、山田先生」

俺は山田先生に俺と織斑先生の喧きの理由を話した。

「如月の言う通りだ……………見ては解るが、あの片手を握ったり開いたりするだろう？」

織斑先生が一夏の手を指し示し、山田先生に教える。

「ええ、確かに握ったり開いたりしてますけど……………」

「あれはアイツの癖でな……………大抵、あの癖が出ると……………」

「アホみたいに単純なミスをしでかすんですよ……………」

その後の織斑先生の言葉を俺が繋げる。

そう、ガキの頃にも何度が重要な場面であの癖を出してしまい、誰でも出来る簡単な事をミスってた事があった。

それのお陰で俺がただ尻拭いしてきたことが……………

あ、何か思い出したら腹立ってきたな……………。

後でOHANASHIさせてもらうか……………！

「へえ……………流石は姉弟と昔からの知り合いなんですねぇ……………」

山田先生、変なところで感心しないでください……………。

「一夏……………」

試合を見ていた篤が心配そうに一夏の名前を呟いた。

と、その時だった。

一夏の動きに変化があったのは……………。

S I D E 直哉 e n d

S I D E 一夏

「せいっ！」

手にした近接ブレードで飛び回るビットの1つを破壊した！

「なっ！？」

「いくぜっー！」

破壊されるとは思っていなかったのか、驚愕の声をあげたセシリアを余所に俺はそのまま別のビットを破壊する。

ビットの射線上、ギリギリに避けつつ2つ、3つとビットを次々と破壊できた…

「そうか、わかったぞ!!」

俺はそのままビットの攻撃を避けつつ、次のビットを攻撃する。

「コイツはお前の意志で動く!……つまり、コイツを動かしている間、お前は何も出来ないって訳だ!」

そして速度を上げて回避を繰り返し、再びビットを破壊する!

「だから、別の方向に意識を持っていけば!!」

その言葉通り、別方向からブレードでビットを破壊する!

「容易に破壊できるってわけだ!!」

「くう……!!」

どうやらアイツは凶星を突かれて旗色が悪くなったようだ!
これならっ!!

「でりゃあっ!!」

残りのビットも破壊して、そのままアイツに突っ込むが……。

「かかりましたわねっ!」

別の方向から現れたビットが俺目掛けてミサイルを放ってくる!
まだあったのかっ!?

ミサイルは既に俺の目の前まで来ていて避けられない!

（くっ……ここまでかっ……ん？何だ！？）

俺はハイパーセンサーの項目を見た瞬間、半ばやけになっていたのもあってそのパネルを押した。

S I D E 直哉

「機体に救われたな、馬鹿め……………」

「漫画みたいなタイミングだなあ……………」

俺達2人は安堵したように呟いた……………。

あのブルー・ティアーズ（織斑先生に教えてもらった）のビットから放たれたミサイルが直撃し、終わったかと思いきや、煙が消えそこに現れたのは先程の白式とは違い、より洗練された白式がそこにいたのだから……………。

「い、一夏……………？」

「…………アレが白式の一次移行『ファーストシフト』ですか……………」

俺は一夏の白式を見ると同時に互いのシールドエネルギーを見た…

……。

「……………けど、これじゃ一夏は負けるかもな……………」

「なっ!？ど、どういう事だ、直哉っ!」

俺の発言に箒が食いついてくる。

いやいや、箒さんや……………状況考えようぜ?

「理由としては第1に一次移行するまでにシールドエネルギーを減らされ過ぎた……………第2に相手のシールドエネルギーはそれほど減っていないから多少の無茶は聞くかもしれないこと……………第3、これが大半の理由だが白式の武装が近接ブレードしかない、よって一次移行しても武器が変わらない、若しくはパワーアップしてシールドエネルギーを使用するかもしれない……………以上の理由だ」

取り敢えず挙げられる理由を述べた。

まああくまで可能性だがね……………。

「ほら、試合が動き出したぞ?」

「っ!」

俺がそう言つと、箒は直ぐにそちらにかぶり付いた。

『勝者、セシリア・オルコット』

あ、一夏のやつ負けたな……………箒もガツクリ気を落としてるし。

まあ、一夏のどこにでも行ってやるかね……………。

既に織斑先生や山田先生は先に行ってるみたいだし……………

更衣室に行くと、一夏がどこぞの某明日の　ヨーの様に真っ白に燃え尽きてうなだれていた…………。

「よ、一夏!」

「……………おう」

……………んゝ、負けたことに関して相当凹んでるみたいだなあ…………。

「まあ、いい線までいったんじゃないか?……………途中で浮かれてたのは頂けないけどな?」

「うぐ……………」

まあ浮かれてたという自覚はあったみたいだし、次からはそう言うのは無くなるだろ…………。

コイツは昔から叩けば叩くほど強くなっていったからな……………それに、白式の戦闘タイプもわかったし。一夏が特訓したいってんなら面倒臭いが、俺も協力してやるかね……………。

あ、そうだ……………気になることがあったな。

「そついえば、一夏……………敗因は結局何だったんだ?」

「…………俺が使った雪片だよ…………アレにバリア無効化能力があったみたいで…………」

「ふうん、そんだけ凄まじい威力ならデメリットも大きそうだな…………」

どうやら事実のようで、あの雪片は威力が多大な分、自らのシールドエネルギーを多大に消費させてしまつらしい…………。と織斑先生は言っていた

「ま、それに関しても要練習だな…………一種の切り札なんだ、普段からバカスカ使うわけにもいかないし、使い処をきちんと見極めな？…………さて、と…………」

俺はコキコキ、と身体を解しながら準備を始める。

…………ちなみに俺はISスーツは着ないからな？

あんなピッチリしたモッコリスーツなんて…………！

「直哉…………負けんなよ？」

「誰に向かって言ってるんだ？…………あんなドリル女、軽く遊んでやるよ！」

俺達は互いに手を打ち合わせた。

さて、次は俺の番だ…………面倒臭いけど、行きますかね！

そのまま俺達は織斑先生達が待つピットに向かった…………。

（余談だが、一夏は勿論ISスーツから制服にちゃんと着替えてた

かな？

流石にISスーツで観戦とかないわあ……。それを直哉が指摘したら慌てて着替えたという………）

対決！白VS蒼（後書き）

次回は直哉VSセシリアをお送りします。

別物でこの作品の記念企画として何か書こうかなあ……何ておバかな事を考えてます（笑）

宇宙の騎士VS蒼の滴（前書き）

今回も酷い駄文の完成です……………。

多分、今まで書いていたものより酷いと思います……

前回は一夏VSセシリアでしたが、今回は直哉VSセシリアとなります。

原作を知らないから色々と突っ込み所が満載ですが、生暖かい気持ちで見守ってあげてください……………。

それと、こんな自分のダメ作品がお気に入り件数90件&突破しました……………！

これに関しては嬉しい限りです（＾・＾）／

見てくださってる読者の皆様、本当にありがとうございます！

宇宙の騎士VS蒼の滴

俺達が着いた頃には既に、織斑先生、山田先生、箒がピットで待っていた。

「さて、次は如月の番だが……………本気で行くつもりか？」

「いやいや、あんなので本気出したら……………ねえ……………」

俺と直に戦った織斑先生、観戦していた一夏、山田先生は首を縦に頷いていた。箒に関しては見ていなかったためか、頭にクエスチョンマークを浮かべていたが……………。

「……………一夏、直哉が織斑先生に勝ったというのは本当なのか？」

事の真意を一夏に尋ねていた。

まあ、世界最強と言われた織斑先生がたかが15のガキに負けたというのが信じられないだろう……………。

「ああ、圧倒的な差で勝ってたよ……………それに直哉はまだ本気じゃなかったみたいだ……………」

いやいや、流石に本気出して戦ってたら世界滅ぶから！
テッカマンの性能をフルに出すつもりはないから！

……………まさかISがアソコまで脆いとは思わなかったし……………

「でも、暮桜を使ったらいい勝負でも出来たんじゃないかな……………
…同じISでもアレだけは性能も違っだろうしな……………」

一応、織斑先生のフォローはしておくでしょう。
流石に本気は出せないけど、ISまで性能落としたらいい勝負になるのは事実だし。

「……………まあ、そういうことにしておこう……………それで、如月は準備出来たのか？」

「はい……………と、その前に……………」

俺は腕に着けてるブレスレットを外し、そのまま掲げた。

「ペガス、起きてくれ」

俺が一声かけるとブレスレットは光を放ち、そのままロボットになった。

「……………なっ！！??」……………」

皆さん、大混乱（笑）
まあ誰にも見せたことなかったしな……………。

「俺のサポートISのペガスだ……………ペガス、自己紹介しろ」

『はい……………マスターのサポートを務めますペガスと申します……………皆さん、お見知り置きを……………』

ペガスが頭を下げて自己紹介した。
ホント、ISに人工知能を組み込んだただけなのにどっか人間臭くなつたなあ……………

「あ、いや……こ、こちらこそ……」

そんなペガスに驚き、一夏達人間勢は釣られて頭を下げた。

……何だ、このシニールな光景（笑）

「まあ俺のデータやら話し相手に関してはコイツに一任してるから観戦中はそっちに頼むわ……」

俺は一夏達に言い含み、胸元のペンダントに付いたテック・クリスタルを外して上に掲げ、叫んだ。

「テエエックッ！セッタアアアッ！！！」

瞬間、俺の体は輝きを纏い次々と装甲が纏われていき光が止んだ頃には全身装甲に覆われた俺がいた……。

「テッカマンッ！ブレードッ！！」

肩のファンからランサーを排出し、それを連結させてピットからアリーナへ飛び出した。

「フ、全身装甲^{フルスキ}タイプのIS……………」

「相変わらず凄いよなあ、直哉のISは……………」

「全くですねえ…………それに相対するオルコットさんが少し哀れに思
います……………」

「…………ペガスと言ったな、よろしく頼むぞ」

『此方こそよろしくお願いいたします…………奥方様』

このペガスの発言を聞き、ピット内の時間が止まった（笑）
ちなみに上から第、一夏、山田先生、織斑先生、ペガスである。

「お、奥方って…………織斑先生がですか？」

「織斑先生…………直哉と付き合っていたんですかっ!？」

「あ、あう…………いや、これはだな……………」

「千冬姉……………」

「い、一夏もそんな微笑ましい目で私を見るなあっ!…」

等と再びカオスになっていたのをアリーナに向かっていた俺が知る
由もなかった（笑）

興奮冷めやまぬアリーナでは観戦していた生徒達が再び熱狂していた。

「えっ！？あれって……………如月くんっ！？」

「（全身装甲型）フルスキнтаイプ……………スゴい……………」

「織斑君に続いて如月くんかぁ……………どんな戦いになるんだろ？」

等々、様々な発言が飛び交う中相對するセシリアは……………。

「……………」

至って落ち着いていた。

先程の一夏戦で思うところがあったのか、冷静に俺を観察していた。

「……………どうした、俺を罵倒するんじゃないかったのか？」

「……………試合を始める前に貴方にお詫びしますわ……………」

……以前までの傲慢さが成りを潜めてる……。
一夏との戦いでどうやら変わったみたいだな……。

「以前、貴殿方お二人を罵倒したこと……誠に申し訳ありませんでした……」

そう言って頭を下げてくるセシリア。

おやま、一夏のやつ……落としたな、コイツを……

「……わかった、謝罪を受け取ろう……此方からも1つ聞いたんだが……」

「はい？なんですよ……？」

「アイツの……一夏の何処に惚れたんだ？」

「っ／＼！？そ、それは……」

「……まあ、今はいいかな……一応、真剣勝負ガチンコで対決だからな……」

「っ！……そうですね、では……先制は私がいただきますわっ！」

バシユウツ！

セシリアは手にしたライフルを俺に放つが……。

「……………」

シュンツ！

俺は軽々と迫ってきたビームを避ける。

「……………どうした？狙うならちゃんと狙えよ？」

「……………くっ！」

バシュウツ！バシュウツ！バシュウツ！

シュンツ！シュンツ！シュンツ！

セシリアが撃ち、俺が軽々と避ける攻防が続く。

「ならっ！これは如何ですのっ！？」

焦れたセシリアが背部のビットをこちらに放ってきた。
だが、俺にはその機動が遅く感じてしまい……………

「ぬうんっ！」

バシィッ！

ランサーを振るい、ビットを徐々に破壊していった。

「なっ！？」

「一夏戦で俺に手の内を見せすぎたな……………今度は俺から行くところか！」

SIDE 千冬

「アイツめ……………遊んでいるな……………」

『その様ですな……………マスターの悪い癖です……………』

私の言葉にペガスが相槌を打つ。

ピットでのあの騒ぎの後、事の原因であるペガスが治めて事なきを得たが……………改めて見ると、どうにも人間臭く感じてしまうな。

『それで、奥方様……………』

「奥方様と言うのは止めてくれないか、まだ結婚すらしていないぞ」

『ふむ……………まだ、と言うことは何れは結婚すると言うことですか？』

「なっ！？何を……………」

『おや、違つのですかな？……てっきり私はそういう仲だと……』

そ、それは……確かに直哉とはそういう仲になりたいが……っ！

……い、一夏達がいなくて良かった……！

私のこんな醜態を晒すわけにはいかんからな……

「お、お前はアイツのサポートと言っていたが……」

『ふむ……本来なら私はISで言うところのパッケージに辺り、戦闘のサポートを致しますが……代表候補生如きで私を使うことは決していないでしょうな……』

……これを聞いた私が思ったことは1つだ……！ペガスを使用した時の直哉はどれだけ強くなるのか？……私でも勝てないと言うのに……。

『ふむ……そろそろ試合が動く頃ですな……』

ペガスのその発言に私はモニターを直視していた……！

SIDE 千冬end

SIDE 直哉

さて、遊ぶだけ遊んだし…そろそろ行きますか！

「それじゃ、行くぞ？……見逃したらあつという間だぞ」

直ぐ様、俺は高速機動を開始した。

「なっ！？き、消えたっ！？」

「遅いつ！」

ガキッ！

「あうっ！？」

俺はセシリアの背後に回り、ランサーで斬りつけた。それでも3割近くで戦ってるんだがなあ？

「くうっ！そこですわっ！」

セシリアはすぐさま振り向いて近接戦用の装備に切り替えるが、残念……！

「俺はこっちだ！」

再び移動して、ランサーで斬りつける。

この動作を繰り返し返している内にセシリアの装甲にヒビが入り、ボロボロになっていった。

「どうだ？降参するか？」

俺は息も絶え絶えのセシリアにそう持ちかけるが……

「ハアツ……ハアツ……ハアツ……ま、まだやれますわ！」

全く、強がっちゃってまあ……。
だが、その根性は気に入ったぜ？

「なら、その根性に免じて俺の技の1つを見せてやるよ？」

俺はそこから飛び上がり、装甲を変形させ、セシリアに突っ込んだ。

「クラッシュッ！イントルード！！」

先程とは比べ物にならないスピードでセシリアに突っ込み、ぶつか
った。

「ぐっ！きゃあっ！あうっ！」

そのまま縦横無尽に駆け回り、上空から勢いを付けて突撃した。

「……………ふう、中々加減が難しいな……………」

本来、クラッシュイントルードは多数の敵を相手に使用する技だが、

つつい使ってしまった。

そして、そこにいるのはISが解除され気絶しているセシリアが横たわっていた。

「勝者——如月直哉——」

そんなアナウンスと共にアリーナに歓声が響いた。

……女子ばっかだから声が高いので、一種の超音波みたいなあ

……

「ここにいと耳がやられそうだぜ……」

セシリアを担ぎ上げ、俺は早々にピットに引き上げた。

そこに鬼が待っているのを知らずに……

宇宙の騎士VS蒼の滴（後書き）

お気に入り件数100件越したら何か記念物で書こうと思います。

軽くネタバレするなら、昔にジャンプでやっていた某M張のネタを

.....

試合後……そして……（前書き）

お気に入り件数、100件突破！

こんなダメ作品にお気に入り登録していただいてありがとうございます
ますm（――）m

これからも極力頑張りますのでよろしくお願いします！！

さて、今回の終盤から急展開っ！？な場面になります

………賛否両論が激しそうですが、完全な自己満小説なので生暖かく見守ってやってください………。

試合後……そして……

SIDEセシリア

「ん……………ん……………ここは……………？」

「おっ！気が付いたか？」

「あ、貴方はっ……………！」

私が目を覚ますと目の前には最初に戦った織斑一夏さんでした……
…／／／

「おお……………ここ医務室だぞ……………気絶する前の事、覚えてるか？」

「えっ……………そういえば、私……………」

あの如月さんの一撃を貰って……………

「……………負けてしまいましたのね……………」

「まあ、あの直哉を相手にすればなあ……………」

一夏さんは無理もないと言いたげな表情で私の肩に手を置きました。
ですが、次こそは……………！

「ちなみに、直哉のやつは3割程度しか力を発揮していないそうだと
ぞ……………」

決意を固めた私に篠ノ乃さんの追い討ちをかけた言葉が私の決意を崩壊させました…………orz

「…………でも！本気の直哉といつかは戦ってみたいな！」

「そ、そうですわねっ！」

一夏さんのフォローで私の決意は復活して固まりました！
いつかは本気の如月さんと戦ってみたいですわね…………でも、今の私には知りませんでした…………。

如月さんの本気と闘うには私達では天と地の差、日本の諺の1つである「月とスッポン」であるという事を…………。

「そ、そういえば…………その如月さんは…………？」

一夏さん達と一緒にいたと思われる如月さんの姿が見えませんが…………。

「……………」

「……………」

一夏さんと篠ノ乃さんが微妙な顔で見合ってます。

…………見るなら私にしてほしいですわ！

「あ…………今、直哉は……………」

SIDE セシリア end

SIDE 直哉

……ただ今絶賛地獄巡り中です……。

あの後、セシリアを抱き上げてピットに戻ったら……

「や、やったな！直哉……」

「……ま、まさか彼処まで圧倒的に強いとは……」

「す、すごいですねえ……き、如月君……」

冷や汗をダラダラ流してる一夏と箒、山田先生と……

「……………#」

妙な負のオーラを纏って俺を素敵な笑顔で見ている鬼の帝王が降臨しております……………。

「……………あ、あ……………一夏？セシリアを医務室に運んでくれるか？」

「あ、ああ！わかったっ！！」

「ま、待て、一夏！私も行くぞ！」

セシリアを受け取った一夏はそのまま脱兎の如く駆け出し、ピットを出ていき、箒も一夏の後を追っていった……。

……逃げたな、あいつら……！！

「じ、じゃあっ！わ、私も残りの仕事がありますからっ！」

「あっ！ちよつや、山田先生っ！？」

「うむ、では頼んだぞ……私は如月に大事な大事なOHANAS H Iがあるのだな！」

何故大事を2回言っただっ！？それにお話の意味が違う意味に聞こえるんだけど！？

「あ、あははは……じ、じゃあ如月君……頑張ってね……」

「何を頑張れとっ！？ああっ！行かないで山田先生っ！？」

ガシッ！……ミシミシミシッ……

「いだだだっ！！か、肩が砕けるうっ！？」

「ほら、お前はこつちだ……今から私と愉しい（主に私が）OHANASH Iの時間だぞ？」

「そんな目の笑ってない状態で言っても楽しくないからっ!？」

「いいからこっちに来い?……逃げたら……判るよな?」

……そんな目が単色の状態で言われたら逃げようにも逃げられない
い……!」

「……わかりました……付いて逝きます……」

泣く泣く俺は千冬さんに付き従うことにした……。
だってあんな目で脅されたら後で何をされるかわからないから……
…。

それから俺達は無人のアリーナにいた。

あれだけ騒がしく思ったアリーナも無人になると物静かなもんだなあ
あ……。

「……それで?ここまで連れてこられたけど、俺に一体何の用が

あるんだ？」

「……………」

俺は千冬さんに尋ねたが、千冬さん自身も何故か無言だった。

「……………流石に俺も疲れて眠いんだけど……………っ！」

帰ろうとする俺に千冬さんが突如、襲い掛かってきた！
何とか反応できて、千冬さんから距離を取ったが……………

「……………どういっつもりだい？……………いきなり襲いかかってくるなんて……………」

「……………本気で闘え、直哉……………」

感情の籠らない表情で千冬さんは言い放った。

……………何だ、どうも様子が変だぞ……………。

「……………お前と本気で闘い、お前は私のモノになる！……………その為には直哉、本気で闘えっ！！！！」

「ちいっ！！……………一体どうなってるっ！？それに……………っ！？」

俺は千冬さんの攻勢を何とか捌きつつ、千冬さんの手にしたモノに目を疑った。

「そ、それはっ……………エビルのテッククリスタルっ！？……………何で千冬さんが！？……………」

「この力があればっ！……………テック！！セッタアアアッ！！！」

瞬間、クリスタルが紅く輝き、千冬さんの身体を包む。

そして、光が止んでそこに現れたのは……………！！

「これが……………テツカマン・エビルの力か……………！」

ブレードと対を成す外見を持ち、ブレードよりも刺々しく攻撃的な印象を持つテツカマン・エビルの姿だった……………！！

「……………何で……………何で千冬さんがエビルにつ！？……………ハッ！？」

「ハアアアッ！！！」

ガキンッ！！

「ガハアッ！！！」

俺はエビルと化した千冬さんに蹴られ、壁まで吹っ飛ばされた……………！！

「ぐうつ……………つう……………さ、流石にテツカマン状態の攻撃は生身じやキツいな……………」

「どうしたあっ！？早くテックセットして闘えっ！！！」

何でこうなったんだ……………ぐうつ……………今の攻撃で右の五番と三番の肋を持ってかれたか……………！！

『……………やはり、こうなったか……………』

すると、突然頭の中に声が響いてきた……！
この声は………！

「神かつ！一体何の事だっ！？」

俺をこの世界に転生させ、テッカマンの力をくれたイケメン神の声だった。

『彼女自身、力を欲していたみたいだね……だから少し後押ししてペガス経由で彼女にテッククリスタルを渡したんだが……エビルにはちよつとばかり厄介な効能があつてね……欲望が強ければ強いほど、その人の精神に深く侵食し、操ってしまうんだ……だから今の状態に陥ってるんだよ……』

「それがかよ………！何でああなったっ！？」

『………原因は、君だよ………如月直哉………』

っ！？お、俺っ！？

「どういう事だ………うおっ！？」

「何時までもボヤボヤするなあっ！！」

千冬さんが待ち焦がれた様に攻撃を繰り出す！
………地面が陥没してやがる………。
あんなもん、喰らったら流石に死ぬな………！

「ちいっ………！俺が原因ってどういう事だ！？お前、何を知って

るっ！」

『…………君は、織斑千冬が君に好意を持っている事に気付いているね？』

「……………ああっ！どこら辺でフラグ立てたか知らないがなっ！！」

千冬さんの攻撃を避けながら神の言葉を返す。

『……………本当にそうかな？……………よく、思い出してごらん？……………君がまだ幼い頃の事を……………』

「幼い頃……………がつ！？」

俺が動きを止めたのが不味く、千冬さんからいいのを貰ってしまい、観客席まで吹っ飛ばされ、意識を失った……………。

試合後……そして……（後書き）

前回の後書きに書いた通り、記念小説を書こうと思います！

少し話が進み次第、掲載するつもりです。

ただ、1つ注意事項が……キャラ崩壊必至です！！！！

宇宙の騎士同士の対決 ブレードvsエビル（前書き）

連投です！

千冬がエビルになりました。

この案はしにがみくまさんからいただいたものです。

ありがとうございますm（――）m

では、また突っ込み処満載ですが、生暖かく見守ってやってくださ
い

宇宙の騎士同士の対決 ブレードvsエビル

「直哉っ！勝負だっ！！」

……………あれ、ここは……………

「……………また懲りずに来たの、千冬さん？」

……………千冬さん？……………何で高校の制服を……………？

「うるさいっ！負けっぱなしでいられるかつ！」

ああ、そうか……………これが幼い頃の記憶なのか……………？だけど、俺が原因って一体何の事なんだ……………？

「ああ、はいはい……………また捻ってあげるからかかってきなよ……………」

……………にしても可愛いげの全くないガキだなあ、ホントに俺かよ……………

『いや、普段の君もあんな感じだからね？』

何だ、いたのかお前……………

『酷いなあ、今この夢を見せてるのは僕なのに……………』

そりゃありがたいと言っかなんと言っか……………

『素直に感謝すればいいのに……………以前から織斑千冬が君に勝負を

挑んでいたみたいだね？……………けど、勝負は毎回君の勝ちで終わった……………ほら、闘いが終わったみたいだよ？』

展開早いな、おい！……………まあいい……………。

「くそっ！何故だ！？何故勝てないんだっ！？」

気づけば千冬さんが息を荒げ、膝を付いてガキの頃の俺を見上げていた。

うわぁ、ガキの頃の俺って性格悪かったんだなぁ……………

『いや、今も悪いからね』

……………後でやるぞ、お前？

「……………千冬さん、もし俺に勝てたら千冬さんのお願い、1つ叶えてあげるよ？」

「くっ！……………お前、その言葉忘れるなよ？」

そのまま千冬さんは立ち上がって帰っていった……………。……………ひよっとして、原因ってコレか？

『漸く気づいたようだね……………』

でも、只のガキの戯言だろ？

高校生の千冬さんがそんな事鵜呑みにするわけがないだろ！？

『まあ初めはそうだったけどね……………あ、場面が変わるよ』

神に言われて目を向けると、確かに場面は変わっていた……。
……あれは……俺と一夏の小学校での卒業式？

「おいおい、泣くなよ一夏？」

「け、けどよぉ……」

そうだった、俺が卒業と同時に世界に旅に出るって言ったときだ……。

「それに、ダチは俺だけじゃないだろ？弾とか一馬、あの猫娘もいるだろ？」

……そう言えば弾とか一馬、後は猫娘がいたなぁ……

『鈴を猫娘って……実際僕の好きなキャラなのに……』

まあお前の好きな子は今はどうでもいいし……ん？？何だ、あの土煙……？

「なああああおおおおやあああつ！……！」

おおっ！？な、何かお子様が間違いなくトラウマになりそうな顔で何か来たぞっ！？

『いや、あれ織斑千冬だから………』

なにいつ！？……あ、確かに言われてみたら……

「お、お前……旅に出るってホントかつ!？」

「あ、一夏から聞いたの?……まあ、ホントだけど……(中の人的に考えて今更、中学とか無いからなあ……)」

……確かにこんな事考えてたなあ……根性ヒン曲がつたガキだ事……。

『だから今もヒン曲がつてるからね?』

……やっぱり今更るぞ、お前……。

『あつ!やめてやめて!!……あつ!』

何だよ、どうかしたか?……元々だけど……。

『僕の扱いひどくない!?展開が動いたんだよっ!』

ほう?

「直哉、あの約束はどうなったんだっ!？」

「あの約束……?」

「お前に勝ったら、その……あれだ……」

「……アレって何の事かな?……よくわからないんだけど?」

……あのニヤケ面に一発ぶちこもつかな……

『いや、アレ君だから……今もドSなのは変わらないけど……』

「…………私が勝てば願いを1つ叶えると言う約束だ！！反故にするのは許さんぞっ!？」

「…………そう言えば、そんな約束してたね……………」

うわ、あのガキ最悪だ……

『だから……………もういいや、突っ込むのも疲れたよ……………』

「……………ならこうしようか?……………俺が日本に戻ってきたらまた勝負の続きをするって事で……………」

「……………本当だな、また戻ってきたら勝負するんだなっ!？」

「うん、また戻ったらね……………」

「……………わかった、ならその時にまた勝負だ!」

そう言つて千冬さんは一夏を連れて家に帰り、俺も旅支度を整えて日本を出たんだよね……………。

『それから、織斑千冬は君との約束の為に修練を積んでたみたいだよ……………』

……………そうか……………これで原因が俺だと言うのも納得いったよ……………。

けど、そこからフラグを立てたかに繋がると考えると疑問が残るぞ？

『ああ、それはIS学園で一度目に君と戦った時だよ……アレから君がどれだけ強くなったか、ISを使って試したろ？……それから君が更に強くなって、イケメンになってたと言うのもあったから君に一目惚れしたってわけだ』

……俺ってイケメンだったの？

『気にするのそっちなんだっ！？……まあでも、これでわかつたろ？君が原因だつて事が……』

……どうしたらいいかねえ、こうだった場合……？

『エビルを制するのに必要な強靱な精神力……これがあれば大丈夫なんだけど、今の彼女は不安定だ……彼女に呼び掛けつつ、全力で彼女と戦うしかないね』

……なら力貸せよ？テツカマン同士が全力で戦ったらIS学園どころか日本が無事じゃ済まんぞ？

『……仕方無いかな、アリーナ全体に結界を張るけど、なるべく早めにケリをつけてくれよ？……本来なら僕が世界に干渉するのは禁忌なんだから……』

……わかった……

『それじゃ、君の意識を戻そう……頑張つてね？』

……言われるまでもないさ……！

『それじゃあ……………』

ガコッ……………

ってまたこのオチかよおおおっ!?

再び俺はイケメン神の作った穴に落とされた……………。

「ん……………むう……………」

意識が徐々に浮上し、俺は辺りを見回した。

……………そうか、俺は……………

「直哉っ!この程度で終わりではないだろうっ!?!早く起き上がってこいっ!」

千冬さん、いやエビルがアリーナの中心で腕組みしながら立っていた……………。

……………散々、待たせちまったみたいだな……………。
これはその罰と受け取っておくか……………!

「今なら全力出しても問題ないって言ってたし……………いくぜっ!!」

俺は胸元のテッククリスタルを外し、上に掲げ、あの言葉を叫んだ。

「テックツ!!セッタアアアアツ!!!!」

テッククリスタルが翠色に輝き、俺の身体を覆い包む。

そして光が止み、中からは赤と白の装甲に身を包んだ騎士「オレ」が姿を表す。

「テッカマンツ!!ブレードツ!!!!」

「……………そうだっ!それでいいっ!!……………ハアアアツ!!」

エビルはランサーを排出し、そのまま俺に向かってきた。

「……………千冬さん、俺の本気……………今、貴女に見せるツ!!」

俺も肩のファンからランサーを排出し、連結させてエビルに向かっていった。

今、ISを超越した宇宙の騎士同士の対決が幕を開けた！！
果たして、直哉は千冬を正気に戻せるのかっ！？

宇宙の騎士同士の対決 ブレードvsエビル（後書き）

感想、お待ちしております……………作者は精神的に脆いのでキツツイのは勘弁してください

終結……（前書き）

今回でブレードvsエビルは決着です

一応、この話で第一部は終了となります。
次は幕間を数話と設定を書きます。

終結……

「うおおおおっ！！！」

ガギンッ！！

「ハアアアアッ！！！」

ガギンッ！！

アリーナ上空で2人の宇宙の騎士がぶつかり合う。

1人は赤と白の鎧を身に纏ったテッカマンブレード。如月直哉。

もう1人は紅のテッククリスタルに洗脳され、操られし黒紅の騎士、
テッカマンエビル。織斑千冬である。

「くうっ……千冬さんっ！目を覚ましてくれっ！！！」

ランサー同士でのつばぜり合いでエビルを説得するブレードだが……。

「アアアアアアッ！！！」

聞く耳を持たないエビルはそのままブレードを押し切ろうと力を込める。

「ぐうっ……うおおおおっ！！！」

ドガアッ！

「ぐっ！」

肋を折られているブレードは痛みのせいか、エビルに押し切られかけたが腹部に蹴りを叩き込み難を逃れ、距離を取った。

「ハアツ……ハアツ……ハアツ……（ぐっ……ヤバイな、エビルの力が想像以上だ……！長期戦に持ち込まれたら此方が不利だ……！）」

ブレードは現状の不利を悟っていた。

幾ら全力を出せるからと言っても加減を間違えばエビルを殺してしまう。

かといって長引かせれば今の手負いの自分では逆にやられてしまう。

……。

ブレードの置かれた状況は正に八方塞がりだった。

「一か八か……やってやるっ！」

ブレードの肩部アーマーのビーム砲を展開させ、そこからブレードのエネルギーを充填させる。

「（チャージし過ぎると逆にエビルを殺しかねん……！加減しないと……）」

だが、ここでブレードは最大のミスを犯してしまう。

エビルにはとある機能があり、それをブレードが失念していた事……。

「……………多少は我慢してくれよ……………！ボルテツカアアアツ！
」

光の奔流となったエネルギーがエビルに向かって放たれた……………。
だが、エビルは微動だにしなかった。

「ハアアアアアツ！！」

「なっ！？」

何と、エビルはブレードの放ったボルテツカを吸収してしまったのだ！

「……………ちいっ！完全に忘れてたぜ、エビルはボルテツカのエネルギーを吸収しちまうんだっ！」

自らの失策を悟ったブレードは直ぐにその場を離れようとするが……………。

「アアアアアアツ！！！！」

エビルはブレードのボルテツカのエネルギーをコントロールし、自らのボルテツカと共にブレードに向けて撃ち返した。

「ぐっ……………間に合わない……………ぐあああっ！！！！」

エビルのPSYボルテツカがブレードに直撃し、アリーナに大きなクレーターを残した。

「ハアツ……………ハアツ……………ハアツ……………この程度か……………直哉あああ

あああつ！！！」

エビルが息を荒げ、大きく咆哮したところでクレーターの中心部から何かが姿を現す。

「ハアツ……ハアツ……ハアツ……うぐつ！」

そこにいたのはPSYボルテッカをまともに喰らった筈のブレードだった。

あの時、ブレードは左腕に装備された小型シールドと、クラッシュイントルードを使用し、その纏うオーラでダメージを軽減していた……。

「ぐううつ……！ガハアツ……！！」

だがそれでもPSYボルテッカのダメージは大きく、アーマーはボロボロになり、ランサーを杖代わりにして立っているのがやっとだった。

「……ハハ……アハハツ……アツハツハツハツ！……そうだ、そうでなければ面白くないっ！！」

「ガアツ！！」

エビルは狂喜の笑みを浮かべ、そのままブレードの首を掴み、持ち上げた。

「どうしたあつ！……お前はその程度の人間だったのかあ！？」

「ぐつ……うつ、嬉しい、か……？」

「何……………」

エビルに締め上げられた状態でブレードが声を絶え絶えに呟く。

「あ、操、られ、た……状態、で……お、俺にか、勝って……そ、
そん、な、に……う、嬉しい、のか……？」

「くううつ……だまれえっ！！」

エビルはブレードの発言に不快感を露にし、更に首を締め上げる。

「ぐううつ！！……む、むか、しの……あ、あんなら、こ、
こん、な……こ、とで……か、勝っても……ぜ、絶、対に……う、
嬉し、く無い……て、言う、ぜ……？」

「だ、黙れ黙れ黙れえええっ！！！！」

「だ、だか、ら……お、俺、が……あ、あん、たを……し、正、気
に……も、戻、す……！！」

「あ、ああ……ああああああつ！！！！」

エビルはブレードを放り投げ、頭を抱え、絶叫する。

「がっ！……か、必ず……あ、あんたを正気に戻してやるっ！！
……起きろっ！ペガスツ！！」

ブレードの腕に装着されたブレスレットが輝き、そこからブレード
より一回り大きいロボットが姿を現す。

『マスター、こっぴどくやられましたな……………』

「ま、まあな……………これも含めてあの人を放置してた罰と受け止めるさ……………それより、力を貸してくれ……………エビルを……………千冬さんを助けるっ！…！」

ブレードの目に力が宿り、エビルを見据える。

「あああああああつ！！！！」

エビルは胸のビーム砲にエネルギーを充填させてボルテッ力を放つ態勢に入った。

『……………畏まりました！奥方様を助けるために……………！』

ペガスはブレードの言葉を聞き、巡航形態になる。

「……………チャンスは、一度きりだ……………それ以上は俺が持たない……………！」

『ラーサ！……………エネルギーチャージ開始！』

ペガスに搭乗し、ペガスに装備されているエネルギーバイパスの役割を果たすグリップを握り締め、肩部アーマーのビーム砲を展開する。

『もう……！願いなどどうでもいいっ！！私のモノにならないのならば、死ねえっ！！死んでから私のモノにしてやるうううう！！！！』

錯乱し、支離滅裂な事を言っているエビルからボルテッカが発射された。

『エネルギーチャージ完了！………マスター！！』

「この一撃にけるっ！！……ハイコートオッ！ボルテッカアアアアッ！！」

ペガスのエネルギーとブレードのエネルギーを合わせたハイコート・ボルテッカとエビルのボルテッカがぶつかり合った。

「ぐううううっ！！………ああああああっ！？」

ハイコート・ボルテッカがエビルのボルテッカを押しきり、そのままエビルに直撃した。

「ハアッ………ハアッ………ハアッ………ハアッ………エ、エビルはっ！？」

ブレードはペガスを待機状態に戻して、エビルを探した。

「う………う………」

そこには変身が解除され、横たわっている千冬の姿があった。
ハイコート・ボルテッカの何割かがエビルのボルテッカと相殺し、
この程度で済んだようである。

「千冬さんっ！……千冬さんっ！！」

「ん……………な、直哉か……………はっ！？わ、私は……………」

「……………大丈夫みたいだな……………ぐっ！？」

「な、直哉っ！？」

安心して緊張の糸が途切れた直哉は変身が解除され、そのまま気を失った……………。

「直哉っ！そ、そうだった医務室に……………」

『その必要はないよ、織斑千冬……………』

「なっ！だ、誰だっ！？」

倒れた直哉を介抱するために医務室に運ばうとするが、突如、頭に響いた声に驚く。

『僕だよ、君にエビルのクリスタルを渡した神だよ……………』

「あ、貴方が……………！そ、それよりも直哉が……………！」

『彼なら心配ないよ……………君を助けるためにかなり疲弊はしているけ

どね?』

それを聞いた千冬は直哉にした事を思い出した。

「あ……………わ、私は……………何て事を……………」

『……………まあ、彼の自業自得だから君が其処まで気にすることはないんだけどね……………まあこれぐらいはしてあげようかな……………』

その声と共に直哉の身体が淡い光に包まれた。

「な、何をする気だっ!?!」

『……………ふう、これでよし……………一応、彼の傷は直しておいたよ……………しばらくは疲労で眠ってるから当分は起きないだろうけどね』

「そ、そうか……………よかった……………」

千冬は神の言葉に安堵した。

それでも、自分が操られたときにした直哉への暴行が消えずにいた。

「しかし……………わ、私はどうしたら……………」

『……………彼なら笑って許してくれると思うけどね……………若しくは、君から告白しちゃうとかね?』

「なっ!?!な、な、な、何を言い出すかつ!?!」

『フッフ……………わっかいなあ……………おっと、あまり長く関わってたら他の神達にどやされるから僕はこれで消えるね♪』

アリーナの惨状も僕の方で直しておくから!』

「あつ!ち、ちよつとっ!?!」

『あ、そうそう……エビルのクリスタルは君を所有者と認めたみたいだから洗脳とかはもう無くなったからね♪』

最後にそれだけを言い残して、神からの声は消えた

「……………はっ!?!そ、そうだっ!直哉は……………」

「Z Z Z……………Z Z Z……………Z Z Z……………」

千冬は直哉の様子を見たが、いい寝顔でグッスリと眠っていた………。

「……………心配かけさせおつて……………」

無然とした千冬だがそのまま直哉の頭を膝に乗せ、直哉の頭を撫でていた……。

「……………ありがとう、直哉……………」

「……………だ……………」

そのまま直哉に感謝を込めて礼を言ったが、直哉の発した寝言が気になって耳を傾けた。

「……………愛してる……………千冬……………」

「……………起きてる……………時に、言わんか……………馬鹿者……………」

直哉の告白に涙を流しながら軽く頭を叩いた千冬。
だが、態度とは裏腹に表情は嬉しそうだ……………。

「……………私もだ、直哉……………」

そのまま2人の影は重なり、辺りの静けさはそんな2人を暖かく見
守っているかのように静かだった……………。

こうして、宇宙の騎士同士の闘いは幕を閉じた。
次の日からはまた騒がしい日常に戻るだろう……………。だが、今はこ
のままで……………愛する者同士の安らかな時間を……………。

終結……（後書き）

いい忘れましたが、幕間を書いたら記念物の話を書こうと思います

感想をくれた読者の皆さんに感謝します（＾人＾）

ありがとうございました

第一章までの設定（前書き）

今回は第一部の設定です。

全く、原作を知らないのでWiki便りですが……

第一章までの設定

如月 直哉

この物語の主人公。

イケメン神に殺され、ISの世界に転生した（享年20歳）

その際にテッカマンをISにしてもらい、肉体能力、知識、資金をチートクラスにしてもらった強欲野郎。

普段は超が付くほど面倒臭がりだが、面倒臭いと言いながら一夏にISの戦闘を教えたり、一夏ハーレムのヒロインにアドバイスしたりと友人思い。

更には弄れる対象があればDSモードのスイッチが入り、泣きが入るまでとことん弄る。

親しい人間には気軽な感じで話すが、自分や友人に敵意を現す人間には口が悪くなり、威圧的になる。

目上の人間には「長幼の序」を備えており、敬語で話す。

戦闘はテッカマンブレードヘックセットし、ランサーを用いた近接戦や、ワイヤーをランサーに接続し投擲する事も可能。

装甲を変型させ超高速で突撃する「クラッシュイントルード」、肩部アーマーのビーム砲を展開させ、そこから発射される必殺武器、「ボルテッカ」を備える。

ただし、ボルテッカはエネルギーを多量に消費し連発は出来ない。

（エネルギーを調整すれば最大で二発使用可能）

元のISよりも圧倒的に性能が高く、直哉のチート能力もあって千冬を越える事実上のIS学園最強の人間である。

第一部の最終話で寝言で千冬に告白する。

…… 2人のその後が楽しみである。

織斑 千冬

原作主人公の一夏の姉にしてこの物語のヒロイン。

IS学園ではその容姿と厳格な態度で生徒に人気が高い。

幼い頃の直哉に何度も勝負を挑み、その度に直哉に地に付けられた。
小学校を卒業する直哉に再戦の約束をし、別れた。

その頃から直哉への恋心を自覚し始めた模様。

3年後に直哉と再会し、模擬戦兼、入学試験で直哉と戦い圧倒的な
差で敗北を喫した。

それが切っ掛けで心の奥底では力の渴望が残り、イケメン神からペ
ガス経由でエビルのクリスタルを受け取るが、エビルのクリスタル
の副作用である洗脳効果によって心の奥底にある力の渴望を引き出
されてしまい、直哉のブレードと相対する。

エビルとなつてからは基本的な装備は同じだが、エビルのランサーは十字型に変形させてブーメランとして扱うことができる。

エビルの一番の特徴はブレードのボルテッカのエネルギーを吸収し、自らのボルテッカとエネルギーをコントロールして放つことが可能な「PSYボルテッカ」を使用可能。

ブレードとの戦闘の際に使用され、際どいところまで追い詰めるが、ペガスのエネルギーとブレードのエネルギーを混ぜ合わせて放った「ハイコート・ボルテッカ」によって敗北する。

その際に洗脳効果が消えて正氣に戻る。

第一部最終話にて疲弊して眠っている直哉にキスをして自らの思いを伝える。

織斑 一夏

原作での主人公のポジションだが、この作品では直哉の親友とランクが下がった。

高校入試にて置かれていたISを起動させてしまい、世界で一人目

のISが使える男子として女だらけのIS学園に入学する羽目になった。

初めはISの事に関して無知もいいところであったが、直哉のスパルタ式の教えで何とか授業にも付いていけるようになった。過去に幼馴染みの篠ノ乃箒の親の剣道道場に通って剣道を習っていたが、入試や生活の事もあり中学3年間は帰宅部まっしぐら。

IS学園に入学してからは箒に剣道でしごいてもらい、昔の勘を取り戻す。

専用ISは「白式」

武装は近接ブレード一本しかないが、「白式」のワンオフアビリティである零落白夜によってバリア無効化能力が備わり、絶大な攻撃力を誇るが、シールドエネルギーを多大に消費させ、事実上の一撃必殺型である。

一夏自身、無自覚の内にフラグを立てる為に箒を初めとしたヒロイン勢は気が気ではない様子。

いずれは直哉と戦ってみたいと思っているある意味で自殺志願者である。

篠ノ乃 篇

直哉と一夏の幼馴染みにして一夏ハーレムの一人。

幼い頃に苛められていたところを一夏に、そしてそこにいた直哉に助けられた。初めに体を張って助けてくれた一夏に好意を抱き、それ以来慕っていたが……姉の「篠ノ乃 束」が原因で転校することになり、一夏達と離れ離れになる。

離れていても一夏を慕う純情な少女だが、素直に好意をぶつけられずについ暴力的な態度を取ってしまう。

剣道の全国大会優勝者でIS学園での一夏の師匠的な存在。

一夏の隣に立ちたいと思っているが、専用機を持っていないためか、やきもきしている。

セシリア・オルコット

イギリスの代表候補生の少女。

金髪に縦ロールの髪型をしており、直哉からは「ドリル女」と呼ば

れている。

当初はIS学園に入学してきた直哉と一夏を快く思っており、見下した態度を取っていた。

（2人からは面倒臭い女と思われていたが……）

そして、一夏の発言に激怒して決闘を申し込む。

（直哉はそれに巻き込まれた形）

彼女が男を見下すのは死んだ彼女の父親が関係していると思われる、戦いの最中での一夏の生き方に胸を打たれ一夏に惚れるようになる。その後、続く直哉との戦いでは手も足も出せずに終わり、心の奥底では直哉の全力と戦いと思っているが…直哉と全力で戦えるのは同じテッククリスタルを持った千冬しかないと言う事を彼女は知らない……。

専用ISは「ブルー・ティアーズ」

BTLライフルとビット、申し訳程度に備わっている近接装備を備えている、いわば「遠距離戦用」の機体である。

ビットで相手を惑わせ攻撃させるが、ビット発射時は自分は攻撃できないと言う欠点を持つ。

ペガス

ブレードのサポートIS。原作テッカマンブレードでのブレードのサポートメカなのだが……………。

人工知能が組み込まれており、人間臭くなってしまった。

直哉の性格が移ってしまい、面白そうな人物がいれば弄ってしまう癖を持つ。

基本的に直哉の執事的な存在になっており、千冬の事を「奥方様」と呼ぶ。

生活面に関しても優秀で外見が完全にロボットなのに料理、洗濯などの家事全般をこなす。

……………一家に一台は欲しいと思うのは作者だけではないはず……………。

直哉と千冬の事を暖かく見守っている。

戦闘面に関してはブレードの全面的にサポートに回り、ミサイルやバルカンで相手を牽制する。

そしてブレードとペガスの特筆すべき点は、ブレードのボルテッカエネルギーとペガスのエネルギーを合わせて放つ「ハイコート・ボルテッカ」。

ブレードのボルテッカをも凌駕しており、含有するエネルギーが大きすぎてエビルエネルギー吸収が役に立たなくさせた。

なお、ペガスの存在を知っているのは直哉、千冬、一夏、箒だけである。

更識 楯無

IS学園の生徒会長。

転校生である直哉と一夏に興味を持ち、直哉と千冬の入学試験をこつそり見ていたが、直哉に呆気なく見破られる。

その正体は裏工作を実行する暗部に対する対暗部用の暗部「更識家」の当主であり、十七代目の「楯無」。

IS学園で最強と称されていたが、直哉の登場により最強の座が揺るぎ、内心は穏やかではない様子。

それ故に直哉に多大な興味を持つてしまったようである。

今のところ、恋愛的な意味で千冬のライバルになる確率は低いが、今後の話如何ではどうなるかはわからない………。

山田 麻耶

IS学園での直哉のクラスの副担任。

男子が入ったことにより、騒がしくなったのを抑える苦勞人。
童顔で眼鏡巨乳であり、走る毎に揺れる二子山は直哉の目の保養になっている。

（余談ではあるが、その光景を見た千冬は寮長室で剥れ、直哉は機嫌を治すために精神的に多大な疲勞を負った）

時折、千冬に姉弟関係や直哉の事をからかつては制裁されている。

第一章までの設定（後書き）

次は幕間を書こうと思います。

まあぶっちゃけると記念作品に入る前の繋ぎ的なモノなので、そんなに長くはないです。

お知らせ

お久しぶりですm(_____)m
このダメ作品を読んでくれている読者様にお知らせです……………。

実は、続きを書いている別のデータをすっかり消去してしまい、幕間の続きがかけなくなりました……。
なので、幕間は一時削除してそのままの原作基準で書こうと思います。

誠に申し訳ございません…それでもこの作品を読んただけなら幸いです……

それに伴って、もう1つのIFストーリーも消去させていただきま
す……………。

こちらの理由はいたって簡単です……………。

先走りすぎました！！

なので、考案を練ってからまた書き直したいと思います……………。

第二章 束の間の休息（前書き）

お久しぶりにこちらを更新しますが、かなり短いです

そして相変わらず駄文です

第二章 束の間の休息

SIDE 直哉

「ん…………むう…………知ってる天井だ……………」

……………半ば寝ぼけ眼で目が覚めた……………。
時計を見ると、夜中の3時だ……………。
いつの間に寝てたんだっけ、俺……………しかも普段使ってる布団じやなく……………」

「何でベット……………？それに……………」

俺は同居人である千冬さんの姿を探すと、ベットの端に人の頭があった……………。

「スウ……………スウ……………」

「……………そうか、思い出した……………」

俺は意識を失う直前の事を思い出した。

……………つか、千冬さんにエビルは正に鬼に金棒だなあ……………。我ながらよく勝てたもんだ……………。
などに関心していると……………」

「んう……………な、直哉……………？」

「……………おはよう、千冬さん……………」

千冬さんが目を覚まして頭を上げた。

ってあれ??何か涙ぐんでないか……?

「だ、大丈夫なのか、身体は……!?!」

「いやいや、落ち着いて……ってそういえば……?」

俺はエビルと化した千冬さんに蹴りを入れられて肋が何本か逝った筈だけど……触ってみたけど痛みを感じない……。

「どうなってるんだ……?あの時、確かに肋が何本かイツたはずなのに……」

「ああ……気を失ったお前にあの神がお前を治していったんだ……」

「……そういうことか……アフターケアは万全って訳か……。ん?何か千冬さんの顔が浮かないな……」

「……直哉、本当にすまなかった……私のせいであんなことに……!」

「……やれやれ、別に千冬さんのせいじゃないのに……」

俺は千冬さんの頭に手を置いて撫でた。

「あ……」

「コレは俺が千冬さんの事を散々放置してた罰だよ……だから気にすることはないさ……」

「し、しかし……」

……まあだ引きずりますかね、この人は……！

「はあ……判ったよ……俺の頼みを聞いてくれればこの件はチャラにするよ……それでいいかな？」

ここで千冬さんと問答を繰り返しても拉致が明かないので俺から妥協案を出すことにした。

「わ、わかった……それで……頼みと言つのは何だ？」

「まあ、難しいことじゃないさ……今度の休日買い物に付き合ってくれるだけ……か、買い物っ!?」……で……」

何でそこまで身を乗り出して食い付いた!?
しかも顔近いからキスしちゃうぞっ!?

「そ、それは……ふ、ふ、2人きりでかつ!？」

「いや……まあ、一夏達誘ってもいいん……2人きりだなっ!？」
……うん、2人きりです……」

あそこまで目を爛々と輝かせて一夏達を誘うなんて言えない……!
言えた奴は俺が勇者の称号を授けるぞ!

「そうかそうか……では、明日にでも出掛けるぞ!」

「まあ、俺は構わないんだけど……千冬さん、仕事は？」

そう、IS学園の教師ともなればいくら休日でもそれなりに仕事があるはずだ。

「そんなもの、山田君に人に押し付けて休んだら買い物の件は無しだよ?」……きちんと仕事する……」

どんだけ職権濫用する気だ、この人は……。

……あれ、考えようによってはこれ、デートじゃないか?

「で、では明日の昼にターミナルに集合ということでもいいな?」

「う、うん……まあいいけど……」

女は支度に時間が掛かるみたいだから、そう言ったんだろうな………。

俺は徐に時計を見ると夜中の4時に差し掛かっていた。
こんなんじゃないや二度寝しても遅刻確定だな……。

「ペガス、起きてくれ」

俺はペガスを起動させ、現させる。

『御呼びですか、マスター………おや、奥方様………体調は如何ですか?』

「だから、奥方様と………まあいい、身体の方は大丈夫だ、問題ない」

『それは何よりでございます………それで、マスター?ご用件は…』

……』

「ああ、俺は今から屋上に行くから……この部屋の片付けを頼むわ」

俺は部屋の見回して部屋の惨状を認識した。
前に片付けたのに、もう既に汚くなっていた。

『畏まりました……では、奥方様……お手伝い願えますかな？』

「わ、私もなのかつ!？」

『マスターを心配して取り乱すのはわかりますが、部屋を散らかすのは頂けませんな……』

口調からしてペガスも怒ってるなあ……。

俺はそんな2人を余所に部屋を出て屋上に向かった。

「はあ……流石にあれ以上千冬さんとツラ合わせてたら俺が緊

張してるのバレバレになつてたなあ……」

俺は屋上の柵を背もたれにして座り込んだ。

「……しかし、ここに入学してからそんなに経ってないのに中身の濃い日常になったなあ……面倒臭いけど、嫌いじゃないな……」

俺は屋上の扉に目を向け……。

「お前もそうなんじゃないか、一夏？」

「……何だ、気付いてたのか？」

扉が開いて、現れたのは一夏だった。
つか、こんな時間まで起きてて平気なのか？

「それで？……俺に何か用でもあったか？」

「いや……早くに起きちまってトレーニングしようかと思って外出たらお前がいたんだよ。」

「……お前も大概、ひまなやつचनाあ……」

「お前ほどじゃないよ、直哉……」

俺達は顔を見合わせて笑いあった。

「……直哉、お前……千冬姉の事、どう思ってるんだ……？」

「何だよ、藪から棒に……？」

「いいから答えてくれ……どうなんだ、直哉？」

一夏の目が真剣だ。……どうやらおふざけで話すわけにはいかな
いな。

「……俺は千冬さんを愛してる……世界中の誰よりもだ……
…」

「……………」

俺は一夏の目を見据えて本心を伝えた。

一夏も無言で俺を見据えている。

「そうか……お前なら千冬姉を任せられそうだよ！……………」

「……………いいのか？」

一夏はシスコンに限りなく近い。

そう思っていた俺は一夏の了承の返事を聞いて内心、驚いていた。
証明しろとか言われそうだったし……………。

「ああ、直哉は強いからな……あの千冬姉にだって勝つんだから！」

「……………ありがとうな、一夏……………」

一夏の楽天的な発言に苦笑する。

でもな、一夏……………。

俺はそこまで強い人間じゃないんだよ……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4233x/>

宇宙の騎士はISの世界でどう動く！？

2011年11月24日20時16分発行